

国際子ども図書館 の 窓

子どもの本は
世界をつなぎ、
未来を拓く!

第 **5** 号
2005.3

表紙デザイン：熊谷 博人氏

《国際子ども図書館行事風景》



講演会「パンチャタントラ」
Manorama Jafa 氏・鈴木 千歳氏



講演会
「インドに伝わる知恵とところ」
坂田 貞二氏



講演会「アジアの子どもの本と私」
松居 直氏



子ども向けイベント
「聞いてみよう！
インドの楽器とインドのことば」



演奏会「楽器が奏でる十二支の動物たち」
東京藝術大学有志の皆さん



ギャラリートーク


ポーロニャ児童図書展寄贈資料
展示風景（第二資料室）



<目次>



口絵 国際子ども図書館行事風景

はじめに	=富田美樹子	2
展示会「蓮の花の知恵ーインドの児童文学」の概要		3
アジアと子どもの本	=松居 直	4
「国際子ども図書館児童文学連続講座 ー当館所蔵資料を使って」を終了して		7
「外国語に翻訳刊行された日本の児童書情報」 ー出版情報の収集と発信ー		9
旧ユーゴスラビアの児童文学	=田中 一生	11
フランスの児童図書の現状 ー5年間の選書リストからー	=末松水海子	18
 ちいさな子どものための絵本の時間	=見形 宗子	25
ケニアの村に図書館をつくる	=福本友美子	26
出張報告 ボローニャ・ブックフェア参加記	=千代 由利	29
世界の児童書ー蔵書紹介ー 国際子ども図書館洋雑誌コレクションからー『セント・ニコラス』ー	=千代 由利	32
活動報告		34
数字で見る！国際子ども図書館		42
これから…		46
利用案内		47

はじめに



国際子ども図書館は、今年開館6年目を迎えます。最早草創期とは言えず、新たな展開のために一步を進める時期に入ったと言うべきでしょう。

これまでは、新しい施設とサービスの立ち上げに、職員一同試行錯誤を繰り返しながら懸命に取り組んできました。企画展示の通年開催や子どもへのサービスなど、国立国会図書館にとって初めてのサービスも、皆さまのご協力をいただきながらなんとか軌道に乗ってきました。新たな一步を踏み出すためには、ここで国際子ども図書館の設立

の趣旨に立ち返り、改めて業務の点検を行うことが必要です。

このような状況を踏まえ、昨年9月に「国際子ども図書館の図書館奉仕の拡充に関する調査会」を立ち上げ、今後の図書館サービスの拡充と発展の方向性について、国立国会図書館長から諮問を行いました。竹内恵会長（日本図書館協会理事長）、松居直会長代理（福音館書店相談役）のもと、有識者の方々による熱心な調査審議が行われています。「子どもの読書とは何か、どういう子どもに育ってほしいか、文字化される前には語りの文化があった、本だけでなくその周辺の資料も必要ではないか、読書を通して考える・聞く・話すというコミュニケーションの場としてはほしい」等々。子どもの現状と未来を考えると、国際子ども図書館には、資料と情報の提供という所謂「図書館」の枠を超えた広範な期待があることを改めて感じています。

調査会では、読書に対する社会の関心の高まりを受け、国際子ども図書館が「子どもの読書」に対してナショナルセンターとしての役割を果たすこと、とりわけ子どもと本をつなぐ仲介者へのサポートの必要性が確認されています。そのためには調査研究や情報提供の基盤整備に加え、何よりも、当館職員自身が研鑽を積むことが求められます。国際子ども図書館では、今年度、館内職員および全国の児童サービスに従事する図書館員等を対象に「児童文学連続講座」を開催しました。今年度は「ファンタジーの誕生と発展」を総合テーマとし、来年度以降も継続的・系統的に開催していきます。講義内容の幅広い共有化のため講義録の刊行も予定しています。研修成果を早速業務に還元したいという受講生が多かったのは、うれしいことでした。

国際子ども図書館の活動が、上野の館内にとどまらず、子どもと本をつなぐ人々によって環となって広がり、それぞれの地域で子どもの読書の現場を豊かにするものとなるよう願っています。今後とも一層のご支援とご協力をお願いいたします。

2005年2月

国立国会図書館国際子ども図書館長 富田美樹子

展示会「蓮の花の知恵－インドの児童文学」の概要

2004年4月17日(土)から9月5日(日)まで、当館3階「本のミュージアム」において、展示会「蓮の花の知恵－インドの児童文学」を開催しました。

当館は、子どもの本に関する活動を国際的な連携の下に展開することを目標に掲げており、特にアジア諸国の中での役割が期待されています。今回は初めてのアジア地域の児童文学に関する展示会として、インドの子どもの本を取り上げました。

開催のきっかけをいただいた鈴木千歳氏(インド児童文学の会代表)に展示会全体の監修を、坂田貞二氏(拓殖大学教授)には特に伝承部分の指導をお願いし、インドのマノラマ・ジャファ氏(IBBY インド支部事務局長)には資料面の協力をいただき、それぞれに講演をお願いしました。また、松居直氏(福音館書店相談役)にも講演をお願いしました。(講演会等関連行事は、「活動報告」36ページを参照)

蓮の花を国花とするインドは、歌と踊りが豊かなところです。古代の人が自然神を讃えたヴェーダ文学、古代叙事詩「ラーマヤナ」と「マハーバーラタ」、仏教説話集「ジャータカ」や王子たちに処世の道を教える「パンチャタントラ」など、語り継がれてきた伝承文学は、インドの子どもと大人に知恵を伝えてきました。こうしたインド発祥の物語は、世界の広い範囲に伝えられました。ヨーロッパにおいては、「イソップ寓話集」に類話が収められ、日本においては、中国を経由して伝来し、強い影響を与えました。「猿のいきぎも」や「くらげ骨なし」といわれる昔話も、日本に同化して今に伝えられているものです。今回は、これらの伝承文学を一つのテーマとして展示しました。

そしてもう一つは、その豊かな自然と伝承文学のなかで育った、近現代のインドの創作児童文学の世界をテーマとしました。ここでは、伝承文学の影響を直接・間接に受けて生み出されてきた、多彩な創作文学の作家や画家たちの活動と絵本などを紹介しました。あわせて、一つの国の中で多くの言語が話されているインドならではの多言語の絵本や、識字教育のための本なども展示しました。

その他、夏休み期間が含まれることもあり、日本の子どもが大好きなメニューの代表格、カレーについての本や、インドの子どもたちの遊びや日常の様子を紹介する本、おもちゃの展示など、子どもが興味を持てるようなコーナーも設けました。

来館者のアンケートも好評で「インドのすばらしい物語が知らず知らずのうちに日本の物語の中に入って、違う深みと幅を加えて私たちの生活の中にあることに感動した」、「インドのお話がこんなに日本にあるとは知らなかった」と新しい発見を書かれた方も多くありました。

国際子ども図書館では、今後もアジアの国々の子どもの本をテーマにした展示会を開催していきたいと考えております。

アジアと子どもの本

松居 直

ひとりの人間として、また日本人として、アジアに強い関心をもつようになった動機は、1945年8月15日の敗戦の体験からです。私は、敗戦のとき満18歳でした。突然に予想もしなかった全面降伏のニュースをラジオで聴き、戦争が終わったことを知ったのですが、まったく実感がわかずしらけた気持ちでした。ただ“死ななくてもよくなったのだ”ということは、なんとなく感じました。

男子は兵隊検査を受けて兵士となり、20歳代で戦場で死ぬものと覚悟してきたのですが、戦争が終わったのだから、もう兵士として死ぬことはない、生きることができるらしいのです。ところが、その“生きる”ということの実感がもてません。この世に生を得て18年間、死ぬために生きてきたのですが、その目標が不意に消えてしまいました。死ななくてよいとは、生きられることです。生き続けるわけです。こうして“生きる”ということが、敗戦後の日々の生活の課題となりました。人として生きるとは？ 人は、何のために生きるのか？ どう生きればよいのか？ という大問題にぶつかりました。

この問題にかけがえのない指針を与えてくれたのが、敗戦直後に手に入れた『大トルストイ全集』（中央公論社刊 1936-39）22巻でした。トルストイならなにかの答えを与えてくれると、藁をも掴む気持ちで、まず『戦争と平和』から読みはじめ、『復活』、『アンナ・カレーニナ』、『幼年時代』と寸暇を惜しんで全集の大半を読みました。そして“生きるとは何か”、“人は如何に生きるべきか”の生と死の問題に、真正面から向きあう心と眼を授かりました。確信といえるようなものではなくとも、光がみえるように思ったのです。この読書体験から、それまでの読書とは異なった読書の意義に気づかされ、読書は、人が生きることに深く深く関わることなのだという意味を悟りました。

敗戦で学んだもうひとつのことは、自分がいかにものを知らず、世間知らずであったかということです。たしかに学校教育でたくさんの大切な知識や技能を教えられたのですが、生きている現実を見究めるに必要な方法や知識は、ほとんど身につけていないことに気づかされました。その最初の衝撃は、アメリカ占領軍が進駐してきたときです。その圧倒的な物量と機動力に眼を見張り、こんな国と戦争をしていたのかと、おのれの無知さ加減を思い知らされました。そして4年間もアメリカと戦争をしていたのに、アメリカについての知識や理解があまりにも断片的で、乏しすぎる自分を知り、無知を恥ずかしいと思いました。学校教育に、強く疑問を感じたのはこのときです。

敗戦の翌1946年に大学に入り、さらに冷静に考えてみると、1931年に私が満5歳のとき勃発した満洲事変以来、15年間も中国と戦争を繰り返しているながら、現代中国の政治や社会、それを支えている思想や文化などについて、これまた貧弱きわまりない知識しかもちあわせていません。中国に対して全く無知な多くの日本人が武器を手にして、戦闘や占領や統治をしていた日中戦争の実態は、想像に余りあります。今になっては教えられなかったことを嘆くのではなく、自分で学ぶしかないと心に決めました。

朝鮮半島に対する36年間の植民地支配についても、改めて関心をもち、朝鮮史の本を極力読みました。それ以外のアジア各国、各地域のことは資料もなく手に負える問題ではありませんが、日本軍が武力で介入していた東南アジア地域での戦争の正体をどううけとめ、世界の人々が願う平和や相互理解になにができるのかも、生きることのなかでしっかりと受けとめようと思いました。私がアジアにとりわけ強い関心をもち心を寄せるようになったのは、こうした体験と動機とによつてです。

やがて出版界に入り、子どもの本の編集者となったとき、先の経験から、近隣の諸国や諸民族へのまなざしをしっかりともち、異文化への柔軟な感性と発想とを養えるような子どもの本、とくに絵本を出版しようと志すようになりました。それが至難の業だと気づいていても、戦争と敗戦という体験を経た人間がしなければならぬ仕事だと思い定めました。1950年に勃発した朝鮮戦争は、わが国に政治・経済の面で多大の影響をもたらし、韓国・朝鮮人への関心が強くなりました。1956年に創刊した月刊物語絵本「こどものとも」に全力を投入していた私は、朝鮮半島の昔話を絵本にすることが緊急の課題だと考えました。

昔話はすべての物語のルーツですし、各民族の伝統や文化に深く根づいています。その共通点や異質な面に、子どものころ触れておくことが、将来の国際理解や交流には大切な経験となるはずで、これに気づいて、手はじめに朝鮮の昔話集から絵本に適した物語を選び、絵本の挿絵の描ける画家を探し求めたのですが、朝鮮半島の自然や文化や人々のくらしを描ける日本人の画家は皆無でした。関心を示す人もいません。36年間の植民地支配からなにかを学びとったのは、柳宗悦のほかには誰もいなかったのです。そこで韓国の編集者や大韓出版文化協会のご協力をえて、1973年にソウルを訪問し、これはと思う画家に会ったのですが、当時としては絵本には全く関心を示されません。ようやく在日の作家と画家の理解をえて、1974年『トケビにかかったバウイ』という絵本の編集に漕ぎつけました。

新中国の出版事情についても情報や資料が乏しく、どう手をつけてよいか見当もつきません。訪中する知人に頼んで、ようやくパンフレットのような絵本を入手し、物語の原作者と交渉して正式の出版契約を交わして、なんとか日本人の画家の手で絵本に仕上げました。中国の昔話の絵本化は、旧満州に十数年居住し、皮影戯（影絵芝居）などの民衆文化に深い関心をもっていた画家の赤羽末吉氏に出会って、

『スーホの白い馬』他の絵本を出版することができました。

この間、1967年に日本ユネスコ国内委員会主催、日本書籍出版協会後援で、第一回「出版技術研修コース」が開催され、アジア地域の14ヵ国18名の研修者が参加しました。計らずも私が子どもの本編集についての講師に指名され、各国の指導的な立場のすぐれた専門家の方々と近づくことができ、一挙にアジアをみる視野が開かれました。そして1969年にはユネスコ東京出版センター（TBDC）が創設され、それが発展して1971年にはユネスコ・アジア文化センター（ACCU）が設立され、アジア共通読物開発事業として子どもの本の共同出版計画（ACP）がはじまり、そのテスト版として『ちのはなし』14ヵ国語版、『たろうのともだち』12ヵ国語版の編集と製作の出版実務を、私が担当することとなりました。この仕事と年ごとの出版技術研修コースをとおして、アジアの参加各国の言語、文字、生活文化、民族と宗教の問題、そして出版事情への理解を深めることができ、ようやく“アジアにおける子どもの本”という視点に立つ手がかりをつかむことができるようになりました。

1971年には ACCU の要請で、アジア各国の子どもの本の出版事情と、文字文化やタイプフェースのデザインなどの視察のために、杉浦康平氏と私とがインド、タイ、ラオス、インドネシア、シンガポールへ派遣されました。はじめて実地に体験する、インド各地や東南アジア各国における生活文化や伝統文化の無限の多様さとゆたかさには、圧倒されるばかりでした。このときにアジアなどとひとくくりで発想すること自体が、アジアを見失うことだと思ひりました。

アジアを視野に収めるには、それぞれの国を詳細に考察し、各民族とその言語と文字、また教育の実態や課題を把握しなければ、その国の実情に応じた子どもの本の出版など考えられません。また出版に関しては、資本、組織、人材、著作者が不可欠ですし、読者と識字や学校制度の問題も無視できません。編集や印刷、製本と用紙の確保をどうするか、さらに流通と販売の問題もあります。一万以上の島があるインドネシアでは、教科書の流通と配布をどうすればよいのかという問題がでます。フィリピンは、七千以上の島があり、言語が複雑なのだから、本をつくる以前に言語問題と識字問題が最大の課題となります。

こうしたことを勘案すると、アジアでは国ごとにきめ細かく交流し、まず実情を把握、分析し、理解を共有して対応を考えてゆかなければならないことがわかります。経済や国際情勢が激しく変化する現代では、その困難さは想像を絶します。だからこそ遠い将来を見越して、無知を克服し、知ることの歓びを養い、異文化理解への手がかりとなる子どもの本の出版が求められます。国際子ども図書館には、カナダの多文化主義にもとづいて出版された、多様な約400冊の絵本が収集されていますが、こうした貴重な資料を参考にして、今後私たちがなにをなすべきか、すなわちどう生きるべきかを真剣に考えねばなりません。

（福音館書店相談役 まつい ただし）

「国際子ども図書館児童文学連続講座 —当館所蔵資料を使って」を終了して

全国の児童サービスに従事する図書館員の専門性の向上と幅広い知識の涵養に資するため、平成16年10月18日から20日までの3日間、国際子ども図書館が広く収集してきた内外の児童書及び関連書を活用した児童文学連続講座「ファンタジーの誕生と発展」を開催した。講師には、館内職員の他、館外から専門家を招いた。館外から35名（全国12府県および東京近郊から11名、23区内から12名）、館内職員のべ34名が参加した。

◎カリキュラム

○1日目

- ・「ファンタジー概論」
神宮 輝夫（国立国会図書館客員調査員、青山学院大学名誉教授）
- ・「国際子ども図書館所蔵資料を使って児童文学（ファンタジー）を調べる」
千代 由利（国際子ども図書館資料情報課長）
- ・館内見学

○2日目

- ・「メルヘンからファンタジーへ」
間宮 史子（白百合女子大学児童文化学科専任講師）
- ・「イギリスのファンタジー」定松 正（共立女子大学文学部教授）
- ・「児童書総合目録活用術」渡辺 和重（国際子ども図書館資料情報課副主査）

○3日目

- ・「アメリカ・カナダのファンタジー」
白井 澄子（白百合女子大学児童文化学科助教授）
- ・「ファンタジーとは何か」井辻 朱美（白百合女子大学児童文化学科教授）
- ・研修生意見交換会

◎講義内容

○「ファンタジー概論」

ファンタジーの定義から、動物、冒険、魔法、神話的などファンタジーの分類、イギリス、アメリカ、フランスなどの代表的な作品の紹介、さらに、日本のファンタジー史も解説された。

○「国際子ども図書館所蔵資料を使って児童文学（ファンタジー）を調べる」

国際子ども図書館の蔵書構成の説明、およびイングラム、池田宣政の両特別コレクションや洋雑誌などのコレクションから、ファンタジーの古典作品を選び、日本における初訳及び代表的な翻訳書とともに紹介した。また、レファレンスに役立つよう、特に洋図書を中心に、ファンタジーを調べるための文献を紹介した。



- 「メルヘンからファンタジーへ」
グリム童話の研究者である講師は、メルヘンや昔話のファンタジー性を異界訪問譚にとり、異世界のイメージを地上（地続き）と地下に分けて、ドイツ語圏のメルヘンから、「白雪姫」や「ホレばあさん」など7点を選び、日本語訳の原文に則して紹介された。

- 「イギリスのファンタジー」

口承あるいは文字化された諸伝説等から説き起こし、イギリスの子ども向けファンタジーの成立背景を清教徒革命の時代から1世紀ごとに説明された。産業革命や宗教運動がファンタジーに与えた影響に触れ、ファンタジーも時代や社会を写すものとして、それぞれの国がそれぞれのファンタジーを持つと話された。

- 「児童書総合目録活用術」

児童書総合目録の概要説明の後、実際の検索例を示しながら使用法を説明した。受講生からは「あらすじ」情報による検索に興味を示された。

- 「アメリカ・カナダのファンタジー」

アメリカとカナダのファンタジーの特徴を国の歴史、風土から説明された。国ごとに資料も多数用意され、ブックトーク形式で紹介された。特に知る機会の少ないカナダや、同一視されがちなイギリスのファンタジーとの違いについて知識を得ることができた。

- 「ファンタジーとは何か」

16世紀の「ユートピア」から現代のネオ・ファンタジーまで、ジャンルを付した作品年表をもとに、ファンタジーについて体系的に説明された。特にタイムファンタジーについては一項を設け詳細に紹介された。ファンタジーの背景説明も児童文学の範囲にとどまらず、小説はもちろん、漫画、映画、アニメ化されたファンタジーまで話が及んだ。

館外受講者との意見交換会および終了時に実施したアンケートによると、ファンタジーについて体系的に学ぶ機会を得たことや、稀少な原資料に触れる機会を得たことは、大変好評であった。

館や機関を代表して参加している意識が高く、職場や同地域の児童サービス担当者に対して研修成果を還元したいとの意見も多くあった。

初めての試みであったが、全国各地から定員の2倍近い受講申込みがあり、アンケートでも継続を望む意見が多く、講座に対する要望の強さを感じた。本講座の内容を図書館サービスの現場で広く共有するため講義録も刊行予定である。今後、研修時期や、テーマ・内容等を検討し、継続しての開催を計画している。

(企画協力課協力係)

「外国語に翻訳刊行された日本の児童書情報」

－出版情報の収集と発信－

日本の児童書のなかには、海外でさまざまな言語に翻訳されて各国の子どもたちに親しまれているものが少なくありません。国際子ども図書館ではこのような海外翻訳児童書を重点収集対象の一つに掲げ、選書に資するために「版元」にあたる児童書出版関係団体各社の協力を得て翻訳出版情報の収集に取り組んでいます。

「外国語に翻訳刊行された日本の児童書情報」事業は、当館が児童書のナショナルセンターとして、蓄積した翻訳出版情報を単に資料の利用提供にとどまらず、情報そのものを広く一般の「児童書に関心のある人」に公開・提供することを目的として実施しているものです。

日本の児童書の海外における翻訳出版情報については、これまで社団法人日本国際児童図書評議会（JBBY）が積極的にデータ収集を行ってきました。1988年に出版された冊子「海外で翻訳出版された日本の子どもの本」（1998年に改訂新版刊行）にその成果が収録されています。改訂新版が刊行された1998年当時は、当館は開館に向けて蔵書構築等の準備を急ピッチですすめていた時期ですが、重要な選書ツールとして本書を活用させていただきました。

2000年1月の国際子ども図書館設立後は、当館が情報収集を引き継ぐことになりました。以降、2004年末までに4回、日本書籍出版協会及び日本児童図書出版協会の御協力を得て各出版社に情報提供を依頼し、1999年以降における翻訳出版情報の収集を行ってきました。

各出版社から寄せられた翻訳出版情報の集約には、汎用のデータベースソフトを利用しました。しかし、そもそも手元にない資料の書誌事項をデータのみを見て確定させるのは難しく、データをなるべく正確なものにしようとする過程で予想以上に時間を要する作業となりました。結果として、最低限「この国で翻訳出版された」という事実を示すことに重きを置くこととし、可能な限り ISBN など資料を特定できる情報を付与するよう努めました。また、翻訳書の多数を占めるアジア諸国の言語による出版物については、文字コードの問題もあって当面これらの書名等の文字を「=」（ゲタ）扱いとせざるを得ませんでした。

また、この作業と前後して、既に当館が所蔵している日本国内で刊行された外国語訳作品も含めた「日本人による外国語児童書」（事業名を「海外で…」ではなく「外国語に…」としたのはこのため）についても、原書情報の確認を行いました。この過程で改めて気づいたのは、月刊の1巻1タイトルを有する「絵本雑誌」の1つの号が海外で翻訳されて単行本化されたものが意外に多かったことで、これらの絵本雑誌が日本の絵本文化を下支えしている実情が窺われます。

なお、利用の便を図るため、当館で所蔵している翻訳書には請求記号を付与しました。

2003年12月に、1999～2000年の翻訳出版情報に当館所蔵の翻訳児童書情報を加えた約700件について、国際子ども図書館ホームページ上に日本語版原書(50音順)とその外国語翻訳版からなるリストを公開しました。さらに、翌2004年5月には、2001～2002年分を追加し、日本語版原書1,194件、外国語翻訳版1,533件に拡充しました。

さらに、年代を超えて翻訳出版情報の一元的な把握を図るため、JBBY 冊子収録データを当館が収集した1999年以降のデータと併せて提供することについてJBBY の了解を得て、日本語版原書2,584件、外国語翻訳版4,400件からなる統合データリストを2004年12月末から暫定的に公開を開始しました。なお、本年3月には検索機能(書名、著者名、国名、ISBN)を備えたデータベースとして本格提供を開始する予定です。

一連の作業の中で痛感したことは、最も重点的に収集すべき資料群の一つであるこれら翻訳児童書の当館所蔵率がまだまだ低いということです。ここには、海外児童書収集における最大のネックでもある「足の速さ」、つまり刊行後数年もたたずして入手が困難になるという理由が内在しています。その傾向は特にアジア諸国において深刻な状況にあり、出版情報をなるべく早く収集することと、書店・代理店を通じた現物の早期入手に一層留意する必要があります。

また、情報発信の面では、懸案であった検索機能を備えたデータベースの公開がようやく実現の運びとなります。しかし、言語の壁やささまざまな要因により、現状では「この本について、どの国で翻訳出版された」という程度の情報の発信に留まるため、情報の中身の一層の充実が課題となっています。

今後、なお一層の資料・情報両面での発信を充実させていきたいと考えていますので、幅広くご活用いただければ幸いです。

最後に、冊子収録データの使用を快諾していただいた日本国際児童図書評議会、大変なお手間にもかかわらず毎年情報を御提供いただいている児童書出版各社、及びその呼びかけの労をお取りくださる日本書籍出版協会並びに日本児童図書出版協会のみなさまに、この場をお借りしてあらためて御礼申し上げますと同時に、今後とも変わらぬ御協力をお願い申し上げます。

「外国語に翻訳刊行された日本の児童書情報」は、当館ホームページからご覧になれます。

(資料情報課)

旧ユーゴスラビアの児童文学

田中 一生

1. 先駆者たち

旧ユーゴスラビア（「南スラブ人の国」の意）とは第一次大戦直後に誕生し1991年、いわゆる東欧革命の余波をうけて解体するまで、バルカン半島の西部にあって南スラブ諸族が共生した一国をさす。国土は日本の約3分の1、人口は6分の1。わずか83年の命であった。

彼らが使用する印欧語系の南スラブ語族にはスロベニア語、クロアチア語、セルビア語、第二次大戦後に公認された（スラブ系）マケドニア語がある。このうちクロアチア語とセルビア語がもっとも近接していて、旧ユーゴ時代はセルビア・クロアチア語ないしクロアチア・セルビア語と称され一語として扱われていたが、1991年以降はそれぞれ独立語とみなされている。

セルビアの児童文学はD・オブラドビッチ（1739—1811）が波瀾万丈の半生を語った『自伝』や『寓話』で先鞭をつけた。いずれも教科書に採用されている。

スロベニアではV・ボドニック（1758—1819『詩歌の試み』）が考えられよう。彼は教科書を執筆し、最初の新聞を創刊し、ナゾナゾや諺や民謡を採集して自ら詩も書いた。



『もっと知りたいユーゴスラヴィア』
柴宜弘 弘文堂 1991

クロアチアでは200あまりの民謡・叙事詩を集め、後のイリリア運動に影響をあたえた司祭A・カチッチーミオシッチ（1704—60『陽気なスラブ人の語り』）がいる。

いずれも教会などが固執する旧来の保守的な文語を打破し、民衆語による文章語の確立に苦勞している。だがロマン主義の時代はスロベニア、クロアチア、セルビアいずれも未だ児童文学にとって不毛の時代だったと言わねばならない。

19世紀のヨーロッパはナポレオン戦争によって幕をあげた。この時スロベニアとクロアチアの一部がナポレオン麾下のマルモン将軍によりイリリア諸州として統治され（1809—13）、フランス革命の理想主義がさまざまな方面で実践された。なか

んずく、それまで二流の言語とさげすまれてきたスロベニア語やクロアチア語が公用語に採用された意義は大きかった。たとえ短期間とはいえ南スラブ諸族の一部が共同体として史上はじめて存在したことも忘れてはならない。やがてクロアチアを中心にまず南スラブ諸族の文化的統一をスローガンにかかげたイリリア運動が展開されるのである。

その頃、セルビア人のV・ステファノビッチーカラジッチ（1787-1864）は対トルコ第一次蜂起に失敗してウィーンで亡命生活をおくっていたが、ヘルダーの影響やスロベニア人コピタル、著名なグリム兄弟の理解と支持をえて『セルビア語文法』『セルビア英雄譚』『セルビア語辞典』などを刊行していた。彼の言語改革によりセルビア語は一音一字主義の明快な文章語となった。彼はまたイリリア運動に賛同しており、セルビア人とクロアチア人は双方の言語を統一することで文化的にも統合できるとして、「文語協定」を1850年ウィーンでクロアチア人と結んだ。だが、それが必ずしも成功したとは言えないことは先述したとおりである。

面白いことに、この頃は各地でイソップやペローの翻訳により未熟な児童文学の欠がおきなわれていたが、『ドン・キホーテ』『ロビンソン・クルーソー』『ガリバー旅行記』なども先ず児童文学のかたちで紹介されている。

19世紀の後半に入ると、こうして文章語となった民衆語による実作が行われるようになり、読みやすい歴史小説として現れた。スロベニアのF・レウスティク（1831-87『マルティン・クルパン』）、クロアチアのA・シェノア（1838-87『農民一揆』）、セルビアのJ・ベセリノビッチ（1862-1905『義賊ベリコ』）など、いずれも読本や教科書に読みやすく書き直されたため、だれもが知るところとなった。

しかし本格的なかたちで児童文学にとりくんだのは先ずセルビアのJ・ヨバノビッチーズマイ（1862-1905）であろう。彼はセルビアのブルジョア社会が最初に形成されたオーストリア支配下のボイボデナ地方で、自ら創刊した子どもの雑誌（『ズマイ（竜）』など）をとおして活躍した。ながらく医師をつとめながら、また引越越し魔と揶揄されるほどたえず移動しながら、いまなお最も国民に愛される児童詩を書きつづけた。

ねえ小鳩さん

—ねえ小鳩さん、お屋根の上の
なぜ楽しげにググググ鳴くの

—お日さまの陽が明るいからよ
緑のはらを照らしてるでしょ

—でも冬の日もググググ鳴くわ
お空はくもり日も出てないわ
なにも楽しいことなどないわ
お日さま空のどこにもないわ

—でもそれだけに楽しさますの
だって冬日もすぐ過ぎさるの
するとお空はまた晴れるのよ
またお日さまは陽を注ぐのよ

ズマイの出現によってセルビアは初めて真の児童文学者をえた。老若男女からいまなお「ズマイ小父さん」と慕われているゆえんである。彼が開拓した児童詩というジャンルは多くの後継者を生み、19世紀の後半から今日にいたるまで、実りゆたかな子どもの王国を形成している。



J. Jovanović Zmaj, Riznica Pesma za Decu, Vuk Karadžić, Beograd, 1980.

2. 20世紀前半

旧ユーゴスラビアの先進地域である北のスロベニアやクロアチアでは市民階級が根付いており、文化活動も盛んであった。なかんずく文学は、識字率が高いこともあって、しだいに民衆のものとなりつつあった。学校教育も本格的にはじまり、ユーゴスラビア建国後は国民意識高揚のため、教科書にはおおくの愛国的な文学作品が採用されたのである。

南スラブ人の運命を大きく変えた第一次大戦は、またクロアチアのM・クルレジャ(1893-1981『フィリップ・ラティノビッチの帰還』『旗])やボスニアのI・アンドリッチ(1892-1975『ドリナの橋』『サラエボの女])など、やがて世界的な作家を生んだ。また同時に、もっぱら児童文学に才能をかたむける作家も現れるようになった。

スロベニアのモダニズムを代表するI・ツァンカル(1876-1918 戯曲『ヤコブ・ルーダ』小説『下僕イェルネイと彼の権利])は詩集『エロチカ』でセンセーショナルな文壇デビューをしたが、晩年『夢のさまざま』で貧しかった幼年時代と母の愛を感動的にえがいた。おなじモダニストの詩人O・ジュパンチッチ(1878-1949 詩集『イースターの卵』『チチバン])は、また優れた児童文学者としても知られる。

チチバンとお父さんの時計

冬はふるえて時をきざむ
夏はあせかき時をきざむ
太陽のもとすべては動く
生まれ死ぬるとき時が鳴る

一方クロアチアのアンデルセンと謳われ、二度もノーベル賞の候補に挙げられたイワナ・ブルリッチーマジュラニッチ女史(1874-1938 『昔ばなし』『^リ稚^ラフラピッチの不思議な冒険』)女史は、もっぱら童話の鉱脈を掘り起こしていた。クロアチアの児童文学は彼女によって確立された。

セルビアのゴーゴリとも言われたB・ヌシッチ(1864-1938)は、戯曲『大臣夫人』などで官僚の俗物ぶりを笑いとばしながら、『世界漫遊』『自叙伝』『義賊たち』などユーモアに富んだ少年少女小説も書いて、いまま根強い人気をはくしている。おなじセルビアの女流詩人D・マクシモビッチ(1898-1993 詩集『まだらの鞆』『緑の騎士』)は、ナイチンゲールのように歌いつづけ、みなに愛された。

ねえ子供たち

ねえ子供たち、わたしは言うわ
この世のすべて、命があるの
石はあるくし、草はうたうの
世界はすべて生きてるのだから
すべてが喋る、青い眼をして
わたしはそれら生きてる物を
胸のすくまで、話したいのね
わたしは愛し、信じているわ
信じているの、この世の善が
しまいには悪に、うち勝つことを

だが1930年代も終わりに近づくと、マクシモビッチの願いも空しく、悪が善をうち負かし第二次世界大戦がはじまった。

3. 20世紀後半

大戦中ユーゴスラビアはやがて大統領となるチトーのもと、勇敢なバルチザン戦争を展開し、ナチス・ドイツから独力で祖国の解放と社会主義社会をかちとった。第二次大戦後のユーゴスラビア文学は、こうした戦果をたたえ自由を謳歌する開放

的な一時期をすごしている。だが東欧諸国の例にもれず、この国にも社会主義リアリズムが蔓延し、児童文学もその弊害を免れることは出来ない。1948年ユーゴがコミンフォルムから追放されてソ連の呪縛から逃れたかに思われたが、祖国は存亡の危機に立たされたとして、文学への締め付けはむしろ強まったといわれる。こうして善悪、黑白、敵味方の二分法で書き分けられた声高な児童文学が一時的に流行した。

そうした流れに棹さすかたちでパルチザン小説を量産し一躍国民作家になったボスニアのB・チョピッチ（1915-84）は、読みやすい文章とユーモアあふれる文体で児童や青少年から圧倒的な支持をえた。《ピオニール三部作》と銘打たれた『若鷺は飛ぶ』『栄えある戦闘』『黄金谷の戦い』で彼は、村の少年たちが平和、占領、戦争という経験をとおして成長するさまを生き生きとえがいた。おそらくユーゴ中の小中学校の教科書では彼の作品がもっとも多く採用されたはずである。そんな彼の口調をすこし覗いてみよう。いたずら猫が粉屋のおやじに折檻されたようすを友達に語る1シーン（『猫のトシャ武勇伝』）。

「なんで南京袋になんかにぶちこまれたんだい」

「おれの知ったことか！ トゥリおやじが聞くのさ。『こっちへ来い、このやろう、ベーコンはどこだ？』『ねずみが弓|いていったよ』『なんで追っぱらわなかったんだ？』『追っぱらったさ。そのとたん、おれの胃袋へ入ったらしい！』そうおれが答えると、おやじがバシッ、バシッと引っぱたきやがった」

とは言え、もちろんすべてがプロバガンダ文学だったわけではない。スロベニアのF・ベウク（1890-1970『自由への道』）、クロアチアのV・ナゾール（1876-1949『パルチザン従軍日記』）、G・クルクレツ（1899-？『電報ものがたり』）、セルビアのT・セリシュカル（1900-69『インディアンと海賊』）、マケドニア語で初めて小説を書いたS・ヤネフスキー（1920-？『ふたりのマリア』）らは、今なお読みつがれている作品を残していた。

だが一時代が終わろうとしていた。戦後の児童文学を3期にわけた評論家S・マルコピッチによると、第2期は1950年代の後半からはじまる。その特徴は、意識的に児童文学を育成しようとする運動が活発になったことであろう。子どもを主題にしたさまざまな祭典やシンポジウムが各地で催され、ユーゴの児童文学は1つの転機を迎えたようである。その要諦は、教育的な目的をもってこれを創造することは止めようという主張だった。1958年にB・ラドピッチ（評論『詩的であるということ』）はエッセイ『子どもと本』の中で訴えた。「われわれは出来る限り子どもに近づかなければならない。もっと子どもの見方に同化しなければならぬ。ことばをもっと自由に、色彩に富んだものに、ことば遊びをも含めた連想豊かなものにならなければならない」。彼のしゃれた詩がある。

子どもって

子どもって へんなものが好きですね

たとえば オタチャリ

たとえば コチュチャリ

たとえば、たとえば・・・・

こうして比較的若い一連の作家が相ついで作品を発表した。女性ではスロベニアのE・ペロツィ（『わたしの傘は風船よ』）、クロアチアのA・マルティチ（『山のみずうみ』）、セルビアのM・アレチコビッチ（詩集『草原』）が特筆される。おもに詩の世界で活躍するのは1920年代に生まれた中堅の作家たちである。モンテネグロのD・コスティチ（詩集『静かな収穫』）、マケドニアのV・ニコレスキー（『魔法の笛』）、クロアチアのG・ビテズ（『木が歩くなら』）、ボスニアのA・ミキッチ（『小さな兵士の物語』）、セルビアのA・ディクリッチ（『青いさめ』）とS・ライチコビッチ（『幼年時代』）などだ。

1970年代にはじまる第3期では、前期の作家たちが熟成したことや、史上はじめて本格的な児童専門誌が現れたことに注目したい。またベオグラードやモンテネグロのニクシッチでは、大学ではじめて児童文学科がもうけられた。

4. 日本に紹介された旧ユーゴの児童文学

旧ユーゴスラビアの児童文学はまず神話や伝説、民話というかたちで伝えられた。その先陣をきったのは、神話学者の松村武雄であろう。松村武雄編『フィンランド・セルヴィア神話と傳説集』（誠文堂 1933年）には、19世紀にカラジッチが採集した、セルビアの児童ならだれでも幼いころ祖父母から聞かされたにちがいない話が45編もおさめられている（英語からの重訳）。おなじ英語からのものに木村庄三郎訳『オクスフォード世界の民話と伝説7—ユーゴスラビア編』（講談社 1964年）がある。ぎょうせい発行の小沢俊夫編、飯豊道男訳『世界の民話4—東欧I』（1977年）『世界の民話第16—アルバニア・クロアチア』（1978年）はドイツ語からの翻訳で、前者にはマケドニア12、クロアチア8、セルビア1、後者にはクロアチア13篇の民話が採録されている。

1980年代に入って原語から直接訳されるようになった。恒文社「東ヨーロッパの民話」シリーズにある栗原成郎／田中一生共訳編『ユーゴスラビアの民話I』、山崎洋／山崎淑子共訳編『ユーゴスラビアの民話II—セルビア英雄譚』で、いずれも1980年に発行された。本格的に童話と銘打って紹介されたのはD・マクシモビッチ／田中一生訳『妖精の女王ドーブラ』（『世界のメルヘン16 東欧童話2』講談社、1981年）がおそらく最初であろう。はじめて単行本として紹介されたのはイヴァナ・ブルリッチ＝マジュラニッチ作 中島由美訳『巨人レーゴチ』（福音館書店

1990) である。

贅言

翻訳者ならだれしも、「成算を度外視してなんでもお前がいちばん望むものをだしてやろう」という奇妙な出版社が現れるのを、心ひそかに待っているものだ。もしそういう僥倖がわたしの身に起こったとしようか。その時わたしはきっと、イボ・アンドリッチの作品を思い浮かべるにちがいない。1961年ノーベル文学賞を受賞した旧ユーゴを代表するアンドリッチが、少年少女をあつかった短編の名手でもあったことは、わが国であまり知られていない。例えば図書館から借りた本をすこし傷めたために恐れおののく中学生（『本』）、野原で狼に出会い死の恐怖をあじわうことでバレエに開眼したお転婆の子羊（『アスカと狼』）、村にやってきたサーカスへはじめて連れてゆかれ馬上の少女に胸ときめかす小学生（『サーカス』）など、懐かしい話をいくつか残している。作者とおぼしき少年がサラエボの町で、秋雨のふる夕暮れどき、本の並んだ陳列窓のまえをなんども行き来する光景を想像していただきたい。貧しい少年はそれらの本をとおして世界の文学を夢見ていたのである。そのとき陳列窓は宇宙の光に変貌し、心から求めてはいても手に入らないことが切なくも判っている、ある星座の一部になった（『書物と文学の世界への第一歩』田中一生／山崎 洋共訳『サラエボの鐘』恒文社 1997）。ポール・アザールに言わせれば、「人は中年になると、・・・魂はあまりにもたくさんの映像を受けとりすぎたために、その乾板も使いふるされて、感度もすっかり鈍ってしまっている」（矢崎源九郎／横山正矢共訳『本・子ども・大人』紀伊国屋書店 1957）のだそうだ。アンドリッチはそうした大人が子どものころの感受性をとりもどすきっかけを与えてくれる。それをぜひ紹介したい。本当にすぐれた児童文学は、まず大人を感動させてくれる筈だとわたしは信じている。

参考文献

Slobodan Marković, Zapisi o književnosti za decu (児童文学ノート), Naučna Knjiga, Beograd, 1991. (原文はキリル文字)

Zapisi o književnosti za decu III, Beogradska knjiga, Beograd, 2003. (原文はキリル文字)

Детская литература (児童文学), Июнь, 1977, Москва.

Jugoslovenski književni leksikon (ユーゴスラビア文学辞典), Matica Srpska, Novi Sad, 1971

『集英社世界文学事典』集英社、2002年

『ユーゴスラヴィア史』S・クリソルド編、田中一生 ほか共訳、恒文社、1993年

(ユーゴスラビア文学専攻 たなか かずお)

フランスの児童図書の現状

－5年間の選書リストから－

末松氷海子

フランスでは、一年間に出版された児童図書の中から、児童文学者や児童図書館員がよい作品として選んだ本のリストを毎年出版している。代表的なのが、児童図書研究センター「本の喜び」(La joie par les livres) が書評誌 *La revue des livres pour enfants* (子どもの本の雑誌) の一環として発行している選書リストである。ほかにも、ボルドーで刊行されている *Nous voulons lire* (この本が読みたい) という冊子に、毎号必ず、選ばれた数冊の本が紹介されるし、一般の新聞・雑誌に児童図書の書評が定期的に掲載されるのも、今では決してめずらしいことではない。



La revue des livres pour enfants

このような選書リストや書評記事が、私のように翻訳や研究に携わるものにとって、なくてはならない貴重な参考資料であることはいうまでもない。しかし、これまでは、ともすれば自分の興味以外のところは読みとばしたり、漠然とした情報を得たりするだけで終わってしまうことも少なくなかった。このたび国際子ども図書館の選書の作業のため、1999年から2003年までに出版された児童図書の選書リストを、さまざまな角度から見る機会を得た。すると、これまであまり気に留めることのなかった側面が、いくつも浮かび上がってきた。自分の関心に沿って本を選ぶ出すのではなく、いろいろな分野の作品をパノラマ的に俯瞰することで、表面的にはあるが、私なりにフランスの児童図書の現状をとらえることができたように思う。

まず印象的だったのは、全体の出版点数の増加だが、こうしたリストには、選ばれた良書しか取り上げられていないのだから、実際にはこの何倍もの児童図書が世に出ていることになる。次に、翻訳作品が大きな比重を占めていることに驚かされた。たとえ名前が変えられていても、ねずみのミミ(メイシー)やおさるのジョルジュ(ジョージ)が、世界中に共通する子どもたちの人気者であることもよくわかる。また、こうした翻訳ものの刊行も含めて、名前の知られた古くからの出版社のほかに、首都圏ばかりでなく地方の中小出版社の出版活動がめざましく、高い評価

を得ていることに興味をそそられる。そのほか、古典や過去によく読まれた作品の復刊本、日本が優位を占めるマンガ・アニメ本、現代社会の諸問題をテーマとするノンフィクションの本が、確実に増えていることなどが見てとれる。このような特色のいくつかを、5年間の選書リストに沿って、具体的に作品・作者にも触れながら紹介してみよう。

1) 外国作品の増加

昨年来日したイギリスの児童文学研究者ピーター・ハントは、講演の中で、翻訳作品の少ないイギリスとは対照的に、フランスの児童書の6割は外国の作品であると指摘した。選書リストは、絵本、低学年向き読み物、高学年・ヤングアダルト向き小説、民話、詩、マンガ、ノンフィクション、雑誌、童謡、マルチメディアに分類されているが、項目によって差はあるにせよ、確かに外国作品の占める割合は大きい。これを2002年度に限って *Aimer Lire* (バイヤール・ジュネス社 2004) という資料で見ると、497点のうち165点がイギリス、52点が韓国、43点がドイツと台湾、34点がアメリカ、32点がイタリア、25点がオランダ、14点がオーストラリアとスペイン、13点が中国、8点が日本、6点がカナダとギリシャ、5点がポルトガルという結果になる。圧倒的に多いのは英語圏の作品だが、この資料には含まれていないマンガを入れれば、日本が第2位を占めることが、わざわざ付記されている。

5年間を通して、とくに翻訳作品の多い小説の分野で毎年名前があがる作家は、日本でも有名なアン・ファイン、フィリップ・プルマン、トルモー・ハウゲン、ユーリ・オルレブ、ルーマー・ゴッデン、ロイス・ローリー、ジャンニ・ロダーリ、ロアルド・ダール、ロバート・コミエなど、そして当然ながら世界中で大人気の『ハリー・ポッター』の作者も名を連ねている。ロダーリのように、有名ではあっても最近日本では目にする事の少ない作家の作品が、ほぼ毎年刊行されているのを見ると、日仏の作品評価の違いと紹介時期のずれが明らかになる。一時期何冊も出版されたロダーリの本が、今ではほとんど絶版になり、新しい訳出はあまりされていないように見受けられるわが国とは対照的といえよう。

翻訳の時期の違いでいえば、1999年にヘレン・バンナーマンの翻訳本が出版されているのには、二つの点で驚かされた。まず、日本でははるか昔に親しまれた「ちびくろサンボ」が、ほんとうに今まで紹介されずにいたのだろうかということ、次に日本では、黒人問題で絶版になって久しいというのに、なぜ今頃になって出版されるのかという二つの疑問がふくらむのだ。復刊本ではなく、新刊書にあげられているのだから、*Le Grand courage de Petit Babaji* (小さいババジの大きな勇気) と題されたこの本は、はじめて出版されたようにみえて、ふしぎな気持ちにさせられる。

世界各国の著名な作家たちと並んで、イギリスの現代人気作家ジャクリーン・ウィルソンの作品が毎年数多く刊行されていることは特筆に値するだろう。2003

年には、国際アンデルセン賞受賞作家キャサリン・パターソンの『悪童ロビーの冒険』も出版されているが、ウィルソンやパターソンのような作家は、リアリズム作品が大多数を占めるフランス児童出版界では、抵抗感なく受け入れられる存在であるといえよう。だが一方では、自国に見るべき作品のほとんどないファンタジー分野でこそ、外国作品の受容がたやすいのではないかと考えることもできる。実際、この5年間を通して見ると、リアリズム作品がやや多い印象があるが、だいたいバランスがとれているといったところだろうか。数少ない日本の作品の2002年度の翻訳を例にとると、ファンタジー対リアリズムは1対1の比率を示している。すなわち、日本を代表するファンタジー作家の一人である安房直子の『鳥』が、*Un secret à l'oreille* (耳の中の秘密)のタイトルで、ミラン社から、土家由岐雄の『かわいそうな象』が *Fidèles éléphants* (従順な象たち)と題して、レ・400クー社から出版されているのだ。後者については、すでに20年近く前、レコール・デ・ロワジュール社から『象のいない動物園』の標題で、同じテーマを別の作家が書いた本が刊行されていた。なお、レ・400クーは、カナダのフランス語圏ケベックの出版社であることを付け加えておこう。

絵本に目を転じると、国内外の作品ともに勢いがあり、先年、フランスの絵本研究学者ソフィー・ヴァンデルリンデンが講演^{*1}の折に語ったように、外国のイラストレーターたちが、苦もなく国境を越えて活躍している様子がよくわかる。絵は文章とちがって、翻訳という手間が省けるだけ、だれからも広く理解されやすい。実際、2002年の選書リストを見ると、その表紙を描いているのは、クエンティン・ブレイクである。キティ・クローザー、アンソニー・ブラウン、エールブリュフらの活躍のかたわら、レオーニ、センダック、スタイグ、バーニンガムをはじめ多くの人気絵本の復刻版が数多く出版されている。フランスでは、時代を問わず人気のあるペロー童話を絵本にする試みが、毎年のように見られるが、ここでも国内外のイラストレーターたちが競いあい、腕を振るっている。

日本の絵本は、2000年に岸田衿子と山脇百合子のコンビで *Roule, boule de neige* 『このゆきだるまだ一れ?』、さとうわきこと二俣英五郎の *Piou - Piou* 『とりかえっこ』、谷内こうたの *Dimanche matin* 『にちようび』、駒形克己の *Petit bout, Histoire d'une larme Pacu, Pacu* 『なみだ』が、2001年には、同じく駒形による *Nora et Hana* 『Nora』、いわむらかずおの *Réflexions d'une grenouille* 『かんがえるカエルくん』が、2002年には駒形の *Found it !* 『みつけた!』、市川里美の *Mon cochon Amarillo* (ほくの子ぶたアマーリオ 日本語版未刊行) が刊行され、2003年、いわむらの *Je réfléchis toujours. Les nouvelles réflexions d'une grenouille* 『まだかんがえるカエルくん』と菊田まりこの *Tu seras toujours avec moi* 『いつでも会える』には、ハート印の最高評価がつけられている。いわむらの *Les rêves d'une grenouille* 『カエルの夢』は、同年マンガ部門でも高く評価されたし、駒形の作品の中には、絵本ではなく、ノンフィクションの美術の項

目にとりあげられたものもある。同じく五味太郎の *Gribouillages* 『らくがき絵本』は、マンガ部門にも美術部門にも、ともに選ばれている。

だが、なんといっても日本の作品が一番多く紹介されているのは、マンガ部門である。「マンガ」という日本語が、そのまま通じるようになったのは、もう10年以上も前からのことで、いまさら驚くにはあたらないが、2002年刊行の池田理代子の『ベルサイユのばら』（“レディ・オスカル”）に、shojomanga と付記されているのには、さすがに驚いた。いつのまにか「少女マンガ」という言葉も、フランスに定着したらしい。内容についても、かつて私の友人たちは「フランス革命がマンガになるのか」とあきれかえったものだが、いまではフランスの若い世代に、なんら抵抗なく受け入れられているようだ。人気マンガ『ベルサイユのばら』のほか、手塚治虫の『鉄腕アトム』『火の鳥』『ブラック・ジャック』が国際的に高い評価を得ているのは当然であろう。宮崎駿の『風の谷のナウシカ』には、「“トトロ”、“もののけ姫”の作者による大傑作、2001年の記念すべき出版」との賛辞がつけられ、『千と千尋の神隠し』も『天空の城ラピュタ』も2002、2003年に続いて紹介されている。ヴァンデルリンデンが先述の講演の最後に『千と千尋の神隠し』を『ふしぎの国のアリス』と比較して、賞賛していたのが印象的だったし、ジャン・ペローは国際グリム賞受賞記念講演で、「ポケットモンスター」をとりあげて、聴衆の意表をついたものだ。

この5年間には、前述の作品のほか、小林まこと、青山剛昌、大友克洋、鳥山明、田中政志、尾田栄一郎、木城ゆきと、武瓶勉、沙村広明、松本零士、高橋留美子、高屋奈月、吉住渉、谷口ジロー、外薮昌也、渡瀬悠宇といったマンガ家の人気のある作品がきら星のごとく並んでいる。とくに2003年は、選書リストに日本のマンガが最も多く取り上げられた年で、なかでも、いわむらの『カエルの夢』とともに、田中政志の『ゴン』、谷口ジローの『遙かな町へ』、宮崎の『天空の城ラピュタ』、毛利甚八の原作、吉開寛二の絵による『たちからお』が、最高の評価を得た。

1970、80年代に安野光雅や林明子が脚光を浴びて、日本の絵本が存在感を發揮し、激賞されたのと同様、今はマンガとアニメが日本の代表的な役割を果しているといえよう。

2) 中小出版社の活躍

1990年代の初め、小型の正方形の絵本が何冊も書店に並び、斬新な発想、ユニークなタッチのイラスト、詩のような文が話題を呼んだ。作者はオリヴィエ・ドズーといい、彼自身の作ったルエルグという新しい出版社から刊行されたこれらの絵本は、これまでにない新鮮な試みとして評価され、作者と出版社はともに一躍有名になった。絵本刊行の場所が、アヴェロン県のロデーズという地方都市であるのも、当初はめずらしく思われた。それ以後次々に中小出版社が各地に誕生し、活躍をはじめることになるのだが、その先鞭をつけたルエルグの存在は、いまなお大きいと

いわざるをえない。現在、創設者のドゥーズーは社を離れて、フリーの創作活動を続けているが、彼のいなくなったあとも、絵本だけでなく小説部門も充実して、ルエルグはいまやフランス児童書出版界の強力な担い手の一つになっている。

中小出版社の特色は、ルエルグの場合にも見られるとおり、まず創設者がコンセプトの決め手であると同時に、作家であり、イラストレーターであること、いわゆる商売やお金の計算を度外視して、理想的な本作りに没頭すること、自身の信念と趣向に従って、書き手や画家を国内外に求めること、過去の優れた作品の復刊・埋もれた作品の掘り起しを行うこと、時には政治・社会・教育活動に参加することなどをあげることができる。かつて出版人セゲールが「出版は商売ではなく、気高い仕事である」と書いているように、この言葉はいまも中小出版社の理念として生き続けているのではないだろうか。

実はルエルグの生まれる以前にも、フランスの大転換期ともいえる1968年革命に続く10年の間に、すでに新しい出版の理想を追求し、実現した小出版社があった。ともに長い教師経験を積んだチュルク夫妻のグランディール社で、当時大手の出版社が見落としてきたような絵本を次々と翻訳紹介した。絵本の色彩は「白と黒だけではいい本とはいえない」といわれた風潮をひっくり返したのも彼らである。また、一般にアングロサクソンの影響の強かった出版傾向に抗して、同社は日本の赤羽末吉、小野千代、谷内こうた、さらにアフリカのイラストレーターたちを積極的に紹介する役割を果たし、現在にいたっている。

ジャン・フランソワ・マニエは、自分が設立したシェヌ社の編集者として、詩人ジャン・フランソワ・マニエの詩集を出版し、妻のマルティエヌ・メリネットがその詩集叢書のすべてのイラストと装丁を手がけた。作家であるクリスチャン・ブリュエルは、いくつかの出版社を経験した後、エートル社をおこし、数々のすぐれた本を世に送ってきた。1970、80年代から有名な、国際アンデルセン賞画家賞候補にも推されたニコル・クラヴルーの絵本を何冊も刊行しているし、クラヴルーを始めアンソニー・ブラウン、アラン・セールについての自身の研究書も出版している。このような個性的な中小出版社はほかにも数多くある。一般書籍から児童書部門を独立させた出版社もあれば、はじめから児童書のみでの出版をめざす社もあって、とても全部を詳しく記すことはできないが、シルコンフレックス、リュ・デュ・モンド、メモ、ミラ、ポケット・ジュネス、アクト・シュド・ジュネス、プティ・タ・プティ、オートルマン、さらに、創設者の名をそのまま使ったティエリー・マニエ、ブノア・ジャックなどの、刊行エネルギーの満ちあふれた活動ぶりには目を見張る思いがする。

たしかに、中小出版社は、大手の老舗の出版社の間隙をぬうようにして、独自の歩みを続けているが、やはり財政的な面での苦労は非常に大きく、大手との吸収合併をせまられる危機もありえよう。理想と現実の間で苦悩するのは、いつの時代も同じである。さらに小さな出版社の場合、どちらかという創設者が自分自身の自

己実現のために出版活動を始める傾向が強い。そのため、中には、子どもの本を作るという理想をかかげながら、結局は「子どものため」というより、「自分のため」の本づくりをしているのではないかと批判される場合も出てくる。また、一般の読者ではなく、ごく一部の愛書家のための稀覯本づくりに励むものもあり、中小出版社と一口に言っても、すべてが同じような活動をしているわけではない。ただ、選書リストに掲載されるような本を刊行する中小出版社の大多数が、すぐれた児童書をつくるために真摯な活動を続けていることはいままでもない。

3) 多彩なノンフィクション

ノンフィクションに分類される本のテーマは、美術、演劇、映画、歴史、哲学、宗教、民族、地理、自然環境、生物、保健衛生、数学、物理、化学、情報など、実に多岐にわたっている。美術の本には、日本の五味太郎や駒形克己が好評を得ている幼児向けの「ぬりえ絵本」「工作絵本」「色彩の絵本」などから、一人の画家を選んで、その作品の軌跡をたどり、美術史的な解説を試みる高学年向きの本までとりそろえられている。中でもおもしろいのは、2002年度に高い評価を得た葛飾北斎についての本だ。作者は、フランスでは以前から有名な、画家と作家を兼ねるフランソワ・プラスで、1977年に小型で出版されたものが大型のカラー版になっている。タイトルの *Le vieux fou de dessin* (絵に狂ったおじいさん) である北斎の少年時代から書き起こし、実物の絵とプラス自身のデッサンとがうまくとけあって、江戸の雰囲気をかもしだしためずらしい本といえよう。

宗教面では、ヴァチカンの「長女」といわれながら、カトリック信仰を実践する人が激減しているフランスだが、聖書にまつわる読み物は非常に多い。聖書の中のエピソードを物語風にして、キリストの言葉をわかりやすく伝える本にまじって、現在の世界情勢やフランスの移民問題を反映してか、キリスト教以外の宗教についての概説書や『子どもに語るコーランの教え』『イスラムの歴史』などの本が見られる。宗教のちがいは、さらに民族問題とも関連して、ヨーロッパ以外の国々、とくにアフリカ、中近東諸国についてさまざまな観点から記述した本が目につく。『なぜ貧しいのか』という本には、援助と貧困の間の矛盾が書かれているし、同じシリーズの『なぜ人は死ぬのか』には哲学的命題が含まれていて、大人にも考えさせられる点がたくさんある。

ほかにも、リストにあげられたいくつもの本の表題から、現代社会が多くの問題をかかえていることを改めて知ることができる。差別問題はとりわけ重要だが、1999年の *Grand livre contre le racisme* (人種差別反対の偉大な本) の幼年版として、2002年に同じ社から、アラン・セール文 ザウ絵で *Le premier livre de toutes nos couleurs* (私たちみんなの肌の色について) が刊行された。ここにはアメリカ・インディアン人の虐殺、奴隷制度、ユダヤ人迫害の歴史が、わかりやすく書かれている。『世界は一つの村』『世界が百人の村だったら』も2002、2003年に相次い

で翻訳された。差別は人種問題だけにとどまらない。男女差別を告発した *Filles=garçons? L'égalité des sexes* (女の子=男の子?男女平等)、さらに女性の歴史と参政権問題を扱った本、子どもの人権に関する本、*L'homosexualité entre préjugés et réalités* (偏見と現状のはざまの同性愛) *L'homosexualité à l'adolescence* (青少年に伝える同性愛) のような本のタイトルを見ることで、問題の重要性が身近に感じられる。麻薬について書かれた本は、青少年への警告の書であり、一方「国境なき医師団」の活動をくわしく述べた本からは、NGO とはなにかを教えられ、未来の仕事に対して一つの指針が与えられるだろう。

社会的な問題を扱うノンフィクションは、子どもたちが問題の本質を読み取り、自身の頭で考えて行動する自立的な人間になれるよう、手助けする使命を意識して刊行されているのは明らかである。

最後に、気づいたことを簡単に記しておきたい。一つは詩集がよく読まれていることだ。フランスでは昔から、有名な詩人の作品を暗記させる授業がさかんに行われていたが、その伝統は今も続いているようで、子どもたちが詩を読んで感じたことを絵に描くという実践がなされている。このような状況を視野に入れて、選書リストには、いつも詩集が取り上げられる。2001年から、リュ・デュ・モンドという出版社が刊行を始めたシリーズは、子どもが手にしやすい小型版で、ユゴーをはじめ現代までの有名な詩人の作品に活躍中のイラストレーターたちがそれぞれ絵をつけた詩集である。同じく人気画家の描くなぞなぞ、わらべ歌、ことば遊びを集めた本も好まれている。なお、ここでは触れなかったが、リストの中の、本の形式をとらないさまざまなマルチメディアは、現代の新しい重要な役割を担っているといえるだろう。

●日本語に未訳の資料には()で原題の直訳をつけた。

※1：講演会「最近のヨーロッパの絵本」(2002年12月16日 於国際子ども図書館 抄録 HP に掲載)

(フランス児童文学者 すえまつ ひみこ)

国際子ども図書館は、世界各国の児童書や関連資料を幅広く集めています。水準の高い資料収集に資するため、開館準備当時から、館外の各言語や各国児童文学の専門家の方々に、国ごとに選書リストを作成いただき、これらのリストを基に資料の収集に努めてきました。

児童書は出版市場の中でも絶版や在庫切れになるのが速く、入手に配慮が必要です。リストの作成をお願いするときには、入手を確実なものにするために、原則として過去5年間に出版されたものの中から選んでいただいています。本号には2003年にフランス語のリスト作成をお願いした末松水海子氏と、2004年に旧ユーゴのリスト作成をお願いした田中一生氏に、こうした作業を通じてお考えになったことなどをご執筆いただきました。

ちいさな子どものための絵本の時間

2004年4月から、3歳以下の子どもとその保護者を対象とした「ちいさな子どものための絵本の時間」（以下、絵本の時間）を始めました。日時は毎月第3土曜日と、それに続く日曜日で、午前11時からです。

これは2002年の全面開館から行っている「子どものためのおはなし会」の年少版です。

「絵本の時間」のある日、開始30分くらい前から子どものへやには3歳以下のちいさな子どもたちの元気な声が響きます。そして廊下には彼らのベビーカーがずらりと並びます。それはいつ見ても嬉しい光景です。

「内容は2・3歳向き」とお知らせしていますが、3ヵ月から4歳直前までと、毎回幅広い年齢層の子どもが参加しています。

そのため、私たちの合言葉は「あわてず、さわがず、臨機応変に」。

絵本の時間の担当者は、「絵本」と「わらべうた」を組み合わせたプログラムを、参加する年齢層を考慮して2～3パターン程度用意して臨みます。

しかし、いざ会が始まってみると予想外の展開。子どもの顔と反応を見ながらプログラムを組み直していくことがほとんどです。

絵本が好きな子にはもう1冊絵本を、わらべうたが好きな子には、もうちょっと違ったわらべうたを。お父さんが多ければ、もっと体を使って遊べるようなものも…。

そのため、舞台裏にはいろいろなものを用意しています。7～8冊の絵本、布あそび用の布、大きなサイズのキューピー人形、秋には課員有志が昼休みに上野公園内で『サリーのこけももつみ』のように、小さな缶バケツに「ポリン・ポロン・ポロン！」と音を楽しみながら拾い集めたドングリ…。

参加した子どもは、保護者と一緒に、絵本やわらべうたを存分に楽しんでいます。その目の輝きと笑顔が私たちのエネルギーにもなります。

保護者の方から、「絵本の時間に参加したら、うちの子が急に本に興味を示すようになりました」という嬉しい声を聞くこともあります。

「4歳になったら、2時からのおはなし会に入れるんだって。楽しみだね。」と館内のポスターを見ながら話している親子連れも多く見られます。

みんな、絵本を楽しんで、ゆっくり大きくなってね。2時と3時の「子どものためのおはなし会」でも待っているよ！

(児童サービス課 見形 宗子)

ケニアの村に図書館をつくる

福本友美子

2004年9月、私はケニアの西部にあるエンザロ村を訪れた。日本の人々の協力によって、この村に子ども図書館をつくることになり、そのお手伝いをしに行ったのである。ケニアで30年にわたり援助活動続ける岸田袈裟さんと、翻訳家のさくまゆみさんとの出会いから、この小さな村に図書館をつくらうという夢のようなプロジェクトが生まれた。岸田さんは、この村の乳幼児の死亡率を下げるために、川の水の簡易浄化装置や、1つの炊き口で複数の鍋の煮炊きができる「かまど」を普及させた人である。アフリカに関心を寄せ、アフリカ児童文学の翻訳にも取り組んできたさくまさんは、2000年にこの村を訪れ、現地の人々に密着した岸田さんの活動に感銘を受けた。その折、村の小学校を訪問すると、教科書を持っている生徒はクラスに2、3人しかいなかったという。畑を耕し、家畜を飼って自給自足の暮らしをする村の人々に現金収入は少なく、すべての子どもに教科書を用意するのは大変だったのである。

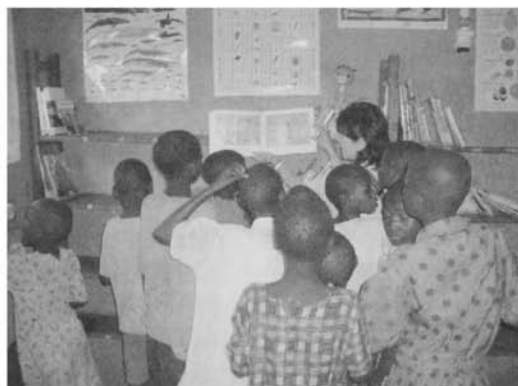
それでも子どもたちは勉強熱心で知識欲にあふれている。さくまさんと岸田さんの話し合いの中から、この子どもたちのために図書館をつくらうという計画がまとまり、「エンザロ・ドリーム・ライブラリー」という名前も決まった。建物は岸田さんの所属する NGO「少年ケニヤの友」がキオスク用に建てたものを半分提供してもらうことになった。よびかけに応じて、日本の児童書出版社、作家、画家たちから続々と英語の本が寄贈された。ケニアには、マサイ、キクユなど50近くの民族が住み、それぞれに民族語をもつが、共通語としては、広く東アフリカ一帯で話されているスワヒリ語を使う。それと共に英語も公用語として大切な役割を果たしており、現在では小学校から授業で英語を勉強するので、子どもたちも英語の本は読むことができるのである。



私は、9月初めに南アフリカのケープタウンで開催された IBBY（国際児童図書評議会）大会に出席した後、さくまさんと共にケニアに向かった。もともと公共図書館に勤めていた私は、地域の小さな分館で毎日子どもたちと本を読んだ経験から、この図書館づくりには大変興味があった。教科書も本もない子どもたちの前に、たくさん本を並べたら、いったいどんな反応があるのだろうか？ 子どもたちに絵本を読んであげたら、どんな顔をす

ののだろうか？ 本より食物や薬を援助するほうが先だとする考え方がある一方で、「長いスパンで考えると、本や物語も食物や薬と同じくらい大事なのではないかと思う」というさくまさんの考えに、大いに共感もしていた。しかし、貧困やエイズなど多くの困難をかかえる国で、いったい本がどのように受け入れられるのか、想像することさえ難しかったのも事実である。

それでも、会ったことのない子どもたちの顔を思い浮かべながら、ケープタウンの書店ではアフリカの地図や事典、動植物の名前を覚えるための壁掛け式チャート、アフリカの子どもが登場する絵本などを買求めた。それに「少年ケニアの友」で購入してくれたスワヒリ語の本などを含め、結局600冊近い本が集まった。私たちは、現地スタッフの方々と一緒にケニアに来た友人2人と共に、この本をどうやって図書館に並べるかを考えた。まず低年齢向きの絵本と童話、高学年向きの文学、



自然科学、社会科学といった大雑把な10の分類をつくり、10色のカラーテープをラベルがわりに1冊1冊に貼る。書棚にもカラーテープを貼れば、色別に本を並べられるだろう。蔵書の印に、日本の友人の制作による図書館のロゴ入りシールも貼った。初めて図書館を利用する子どもたちに向けて、本を大切にしよう、読んだら元に戻そうなどの「お約束」を書いたポスター

もできた。

さて、オープニング当日の朝、車に本を積んで到着すると、大勢の子どもたちが待ち受けていた。驚いたことに、村長さんの司会で、まずは図書館のテープカット。続いて記念植樹、お祈り、子どもたちの歌や踊り、校長先生や長老たちの挨拶などがあり、思いもかけぬ盛大な歓迎に一同感激。村の人々が道端にも大勢つめかけて興味津津見守るなか、私たちもお返しに、スピーチや読み聞かせなどをし、子どもたちの踊りの輪に加わった。

セレモニーが終わると、いよいよ子どもたちを図書館の中に招き入れる時がきた。本は子どもたち自身の手で棚に並べてもらうことにした。少しでも本にさわってもらいたかったからである。子どもたちは、先を争うようにダンボール箱から本を出し、言われた通りカラーラベルを見ながら色別に棚に並べていく。しかしよく見ると、背表紙を奥に向けたり、上下が逆だったり、横に寝かせたりしている。たくさんの本が整然と並んでいるところを、この子たちは見たことがないのだ、というこ

とに気付いてはっとした。しかし実際に絵本の読み聞かせを始めてみると、お話の世界を楽しむ様子は日本の子どもたちと全く変わらない。それどころか、読み手の私と声を合わせて大きな声で文章を読み始め、字を読むのがうれしくてたまらない、という気持ちが伝わってきた。後ろに回って、私の腕や髪にさわる



子や、くっついてくる子もいて、本当にかわいかった。そんな大勢の輪の中にはいらずに、隅で1人、くい入るように本を読む子の姿も印象に残っている。また先生たちも、本を手に取り、小さな紙片に何やら熱心に書き写していた。教科書の足りない学校での教材に役立つ本があればうれしいことである。

想像以上の手ごたえに感動した私たちが、今後この図書館をどのように運営していくのかも考えなければならない。村長さんが鍵を管理し、平日は学校や保育園のクラス単位で、先生の引率のもとに利用してもらうこととし、週末は近くの幼稚園の先生が世話を引き受けてくれた。「少年ケニヤの友」のスタッフが月一回、利用状況の調査や本の補修をしに行ってくれることも決まった。その後の報告によれば、子どもたちばかりか、大人も来るとのこと。ニュースが地元の新報に載ったので、近隣からの見学者もあり、入館者は増え続けているようである。



撮影 さくま ゆみこ

絵本の読み聞かせに聞き入る子どもたちのキラキラした目は、今も心に焼きついている。しかし図書館にやってきた保育園の園児たちは、ほとんどがエイズ孤児だと聞いた。子どもたちの前途に、多くの困難が待ち受けているのは確かだが、図書館の本が、広い世界を知る窓となり、希望の糧となることを願わずにはられない。

(児童図書翻訳家 ふくもと ゆみこ)

平成16年4月13日～21日まで、イタリアのボローニャを訪問した。ボローニャ・ブックフェアに参加し世界の児童書出版に関する情報収集と、同事務局から申し出のあった資料寄贈について協議することが主たる用務である。



マッジョーレ広場

ボローニャ

北イタリア、エミリア・ロマーニャ州の州都ボローニャは、世界最古のボローニャ大学を擁する歴史都市であり、日本ではサッカーの中田英寿がボローニャのチームにレンタルされたことで話題になった。ボローニャの中心部は城壁に囲まれた六角形をしており、ヨーロッパの都市の中でも中世の街並が良く保存されている。所得や教育レベルが高く、

治安も比較的安定しており、古くからの交通の要所として、イタリア国内の暮らしやすい都市ランキングでは常に上位に位置している。

ボローニャ市は2000年に EU から「ヨーロッパ文化都市」に指定され、文化的インフラ整備を中心とした「ボローニャ2000」の様々なプロジェクトを繰り広げた。たとえば、市の中心マッジョーレ広場に面した市庁舎には市立美術館が作られ、隣接する旧株式取引所は保存修復工事により、外観はそのままに、900以上の座席を持つ、イタリア最大のマルチメディア対応の図書館として生まれ変わった。この中には、新たに児童図書館も設置された。滞在最終日に両館の見学の機会を得た。古い建物を利用しているため、必ずしも機能的とはいえないが、老若男女の利用者で賑わい、市民の図書館として人々の生活にしっかり定着している印象を受けた。また、1563年に建設され1803年まで大学として使われていた旧ボローニャ大学は、現在市立図書館になっている。

ボローニャ・ブックフェア（ボローニャ国際児童図書展）

ボローニャ・ブックフェアは、毎年4月初旬に開催される世界最大の子どもの本の見本市である。41回目の2004年は、4月14日～17日の4日間開催され、63カ国から1,166の出版社が参加した。会場は、ボローニャ市の中心から車で15分程度の郊外にある広大な見本市会場。出版動向の把握、商取引、版權の売買・交渉、売り込みや、新しい教材情報の入手のため、各国から出版関係者、作家、画家（イラストレーター）、エージェント、TV/映画プロデューサー、教育関係者等が集まる。ブックフェアの会場は約20,000平方メートル、地域・国ごとに大きく7つに分け

られている。出版社の個別ブースのほか、各国の出版協会の共同ブースや、IBBY や各国 IBBY 支部、ミュンヘン国際児童図書館やフランスの「本の喜び図書館」などのブースも開設されている。また、著作権取引センター、TV/フィルム版權センターが設けられているほか、昨年からは、米教育出版協会とポーロニヤ・ブックフェア事務局の共催による教材を中心としたビジネスの場 GLI (The Global Learning Initiative) も設けられ、さかんな PR 活動が繰り広げられていた。

また、期間中様々なテーマの子どもの本に関わる展覧会、講演会、文化イベント、国際的な会議が開催される。* イベントの一つとして、IBBY 主催の、隔年に授与される国際アンデルセン賞の受賞作家・画家の発表が毎回このブックフェア会場で行われる。今年度の受賞者は、作家賞をアイルランドのマーティン・ワッデル (Martin Waddell)、画家賞をオランダのマックス・ベルジュイス (Max Velthuijs) が受賞した。IBBY のブースには、受賞者の大きな写真や作品が並べられ、最終審査まで残った候補者たちの作品も展示されていた。ベルジュイス描く動物の姿を髣髴させるご本人を会場内でみかけた。表彰は9月に開催される南アフリカの IBBY 世界大会で行われることになっていた。

ミュンヘン国際児童図書館のブースでは、毎年このブックフェアに合わせて、『ホワイトレーベン』に掲載される世界の子どもの本250選が紹介される。また、マッジョーレ広場に面した古い宮殿 (現在は市庁舎) の一室で4月15日夕刻、スウェーデン大使が出席して、2003年に制定された「リンドグリーン記念文学賞」を披露する式典とカクテルパーティが開かれた。

* 『いのしし親子のイタリヤ旅行』(渡辺茂男作 理論社 1987) には、ポーロニヤで開かれる童話の国際会議に参加する童話作家イーノ一家の珍道中が描かれている。



ミュンヘン国際児童図書館ブース

ポーロニヤ国際絵本原画展

ポーロニヤ国際児童図書館展に併せて、1967年以来毎年開催されている国際絵本原画コンクールも大きな催し物の一つである。2004年は64カ国から2,775名の応募があり、21カ国から100名 (内日本人は16名) の受賞者が選ばれ、4月16日、会場内イラストレーション・カフェで表彰式が行われた。図録 (Annual) の表紙は、BIB (プラチスラヴァ世界絵本原画展) グランプリ受賞者とアンデルセン賞画家賞受賞者が交互に表紙を飾ることになっており、2004年は、2003年 BIB グランプリ受賞者の出久根育氏の絵が表紙を飾った。原画展の会場入口にこの猫をモチーフにした巨大な絵が掲げられていた。

日本では、「ポーロニヤ国際絵本原画展」の名称で、1978年以来毎年国内数カ所で巡回展が行われている。



ボローニャ・ラガッツィ賞 (ボローニャ国際児童図書賞)

ラガッツィ賞とは、ボローニャ・ブックフェア協会が主催し、毎年、優秀な児童書の出版活動を行った世界の出版社に贈られる賞で、ブックフェア初日に会場で表彰が行われる。賞は、フィクション、ノンフィクション、ニューホライズンの3部門から

なり、それぞれ、最優秀賞、優秀賞が与えられる。このうちニューホライズンの部は、活発な出版活動を行った発展途上国の出版社に与えられる特別賞である。

応募資格はその年のボローニャ・ブックフェアに出展する出版社であることと、応募作品は過去3年以内に出版したオリジナル作品に限られることである。2004年の応募国と応募総数は31カ国171社、約1,100点であった。2004年のフィクションの部最優秀賞は、フランスのエディション・エートル社がエルブルッフ (Wolf Erlbruch) の『大いなる疑問』で、ノンフィクションの部はアメリカのファラー・ストラウス&ジルー社がシス (Peter Sis) の『生命の木』で受賞、ニューホライズンの部はイランのシャバヴィズ社が受賞した。応募作品数の多い上位5カ国の作品数は、フランス (154)、アメリカ (131)、韓国 (85)、イギリス (84)、イタリア (72) で、受賞が応募作品数にほぼ比例している。日本からは9社38作品が応募した。(http://www.bookfair.bolognafiere.it/standard.asp?!=2&m=12&p=Libro2001premi)

国際子ども図書館のラガッツィ賞応募作品の包括収集

2003年7月、ボローニャ・ブックフェア事務局から、事務局長エレナ・パゾーリ氏を通じて、ILCL へ上記ラガッツィ賞応募作品の一部を寄贈したいとの申し出があった。世界各国の新刊書が一括して入手できる良い機会であり、申し出を喜んで受けることとし、筆者がボローニャを訪問し、受領のための手順を協議した。事務局からは来年度以降についても継続的な寄贈の意向が示された。また ILCL は、これを機に、ラガッツィ賞応募全作品を収集していくことにし、寄贈されなかった分については、購入によって収集していくこととした。7月28日に寄贈資料475冊が到着した。お披露目を兼ね、9月中旬から1ヵ月間、第二資料室において小展示を行った。データ整備を経て資料の利用が可能になるのは2005年4月以降になるが、世界からイタリアに集まり、日本に運ばれたバラエティに富んだ世界の児童書が、利用者に大いに活用されることを期待している。

(ボローニャからの寄贈資料については、「ボローニャ児童図書展寄贈資料」国立国会図書館月報523 2004.10を参照。)

(ちよ ゆり 資料情報課長)

国際子ども図書館洋雑誌コレクションから —『セント・ニコラス』—

千代 由利



半年累積版

『セント・ニコラス』 *St. Nicholas : a Monthly Magazine for Boys and Girls*. 月刊 [所蔵 1(1) : 1873.11-67(2) : 1939.12 欠42(4), 58(8)] (当館請求記号 Z57-A5)

雑誌は時代や社会・世相を反映する。特に子ども向け雑誌には、その時代の大人が、子どもに託す夢や期待が色濃く映しだされる。

19世紀のアメリカでは、工業化や経済の急激な進展が社会構造にも変化をもたらした。子どもは単に「小さい大人」で、子ども時代はよい大人になるための訓練期間にすぎないと考えられていた子ども観にも、大きな変化が起こった。「子ども」は「子ども」として認識され、個々の人格が重視されて、独自の立場が認められるようになった。こうした子どもたちのために、1820年代から児童雑誌が次々に創刊された。多くの優れた作家がまず雑誌に作品を発表した。19世紀アメリカの児童文学の歴史はそのまま児童雑誌の歴史ともいわれる所以である。この時期はまた、お手本にしていたイギリスからの脱却を図り、アメリカ独自の児童文学を生み出そうとした時期でもあった。

『セント・ニコラス』は、こうした児童雑誌が成熟してきた19世紀後半の1873年に創刊され、高い評価を得たアメリカの児童雑誌である。1870年、当時有名な文芸誌 *Harper's Monthly* や *Atlantic Monthly* に対抗して、*Scribner's Monthly* (後 *The Century*) を刊行し成功を取めたスクリブナー社は、1873年11月、同誌のコンセプト、構成を取り入れ、同誌から当時一流の作家、画家を起用して児童向け雑誌の刊行に乗り出した。当時すでに編集経験があり、『ハンス・プリンカー 銀のスケートぐつ』の著者として名声を得ていたメアリ・メイブス・ドッジ (1831-1905) を編集長に起用、美しい装丁で中上流階級の児童層に上質の娯楽を提供した。競争相手の児童雑誌を次々に買収するとともに、寄稿者、読者をも取り込み、発行部数は当初4万部、後7万部を維持続けた。ドッジは32年間編集長として君臨し、教訓臭を一切廃し、児童雑誌は自然で楽しめるものであると同時に、理想と価値感はしっかり伝えるという確固たる編集方針のもと、児童雑誌界のみならず、児童文学でも指導的役割を果たした。ルーザー・M・オルコット、スーザン・クー

リッジ、ハワード・パイル、フランシス・M・バーネット、マーク・トウェインをはじめ、アメリカの児童文学史上に名をとどめる作家で、『セント・ニコラス』に作品を書かなかった作家はいないといってよい。キプリングの『ジャングル・ブック』の数編も掲載された。幅広い年齢層の購読者をひきつけ維持するために、読者参加型を図るなど、さまざまな工夫がこらされた。1899年、投稿欄「セント・ニコラス・リーグ」を設け、以来ノーマン・ロックウェル、スコット・フィッツジェラルド、リング・ラードナー、ウィリアム・フォークナー等、後に有名になった多数の作家が10代で投稿している。『沈黙の春』の著者で生物学者のレイチェル・カーソンも11歳の時金メダルを得、以来数回入賞している。

ドッジ亡き後もアメリカの中上流階級の理想を提示する編集方針は受け継がれ、発行部数は安定を保ったが、1930年の親会社の売却や1930年代以降到来した安価で大量生産の雑誌の時代には勝てず衰退をたどった。何社かへの売却を経て、1940年、1943年に再起を図るが果たせず、1943年ついに70年間の歴史を閉じた。

当館は、若干の欠号があるが、実質的な終刊といえる1939年までほぼ全巻を所蔵している。

誌名・出版社・出版地の変遷は、下記のとおりである。

St. Nicholas: Scribner's Illustrated Magazine for Girls and Boys (vol.1, no.1, 1873—vol.8, no.12, 1881); Scribner & Co., New York

St. Nicholas: An Illustrated Magazine for Young Folks (vol.9, no.1, 1881—vol.56, no.12, 1930); The Century Co., New York

St. Nicholas for Boys and Girls (vol.57, no.1, 1930—vol.67, no.4, 1940; vol.70, no.1—no.4, 1943) American Education Press, Columbus, Ohio (1930—1934), Educational Publishing Corporation, New York and Dairen, Conn. (1934—1940), St. Nicholas Magazine, Inc., New York (1943)

[参考文献]

* *Children's periodicals of the United States: Historical Guides to the World's Periodicals and Newspapers*. Ed. by R. Gordon Kelly. Greenwood Press 1984

* アメリカの児童雑誌「セント・ニコラス」の研究 「セント・ニコラス」研究会編刊 1987.2 212p.

* オックスフォード児童文学百科 ハンフリー・カーペンター、マリ・ブリチャード著 神宮輝夫監訳 原書房 1999

* 「セント・ニコラス」試論—こどもに求めるもの 岸上真子 (『淑徳大学研究紀要』20 1986 pp. 113—129)

* 「セント・ニコラス」の研究(1)(2) 岸上真子 (『淑徳大学社会学部研究紀要』32 1998 pp. 241—257, 33 1999 pp. 197—214)

* 「沈黙の春」レイチェル・カーソン 10代の草稿 (読売新聞 2004年7月3日夕刊)

(ちよ ゆり 資料情報課長)

活動報告

(平成16年1月～12月)

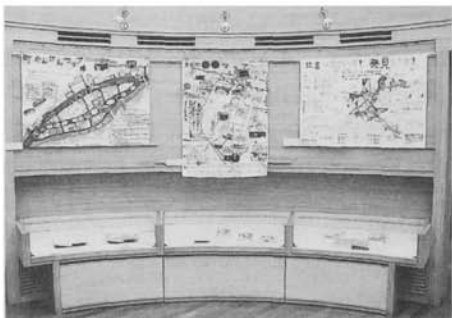
1. 展示会

国際子ども図書館では、子どもの本のもつ魅力を伝えるとともに、子どもと本の出会いの場を提供することを目的として、子どもの本・文化に関する展示会を「本のミュージアム」で行っている。平成16年は展示会を4回開催した。

○「みんなのちずー全国児童生徒地図優秀作品と子どもの地図の本展」

〔平成16年1月17日(土)～2月22日(日)計29日；入場者数6,954人〕(国土交通省国土地理院との共催)

子どもたちに地図を身近に感じてもらい、科学的な読み物により広い関心をもってもらうため、国土地理院が毎年行っている「全国児童生徒地図優秀作品展」に出展される全国の学校生徒の地図作品の一部(82点)と当館所蔵の地図に関する児童書(116冊)を展示した。地図作品の展示はつくば市の国土地理院においても同時に開催されたもので、前期後期に会期を分け、後期はお互いに作品の入れ替えを行った。



○「いろのまほうつかいーエリック・カール絵本の世界ー」

〔平成16年3月7日(日)～3月30日(火)計18日；入場者数9,397人〕

(「子どもの文化交流体験事業」実行委員会との共催)

世界的な絵本作家エリック・カール氏の魅力あふれる絵本の世界を子どもたちに知ってもらうため、エリック・カール氏の絵本原画(約80



点)と絵本および靴や絵筆・パレットなどの関連資料等を展示した。

展示会開会前日の3月6日は「子ども文化交流フェスティバル2004」のオープニング・セレモニーを開催した。セレモニーに引き続き、岸田今日子氏による『はらぺこあおむし』の読み語りとエリック・カール氏による講演及びワークショップを行った。これらの行事は、メイン会場である当館と青森市、津市、山口市、福岡市の全国4つのサテライト会場をTV会議システムでつなぎ、各会場で放映された。参加者の子どもたちとエリック・カール氏との質疑応答のやりとりも行われた。

○「蓮の花の知恵—インドの児童文学」

[平成16年4月17日(土)～9月5日(日) 計115日：入場者数28,286人]

(本文3ページを参照)

○「本にえがかれた動物展Ⅱ—十二支を手がかりに」

[平成16年9月18日(土)～平成17年4月10日(日) 計79日：入場者数18,078人]

※開室日数、入場者数は平成16年12月末現在

この展示会は、昔話や児童文学に多く登場し、人間との関わり方によってさまざまにえがかれる「動物」をテーマとした。平成13年に開催し好評であった「本にえがかれた動物展」と切り口を変え、日本やアジアの国々で親しまれる「十二支」の動物が登場する本を展示した。また特別コーナーとして、イソップを中心とした「動物寓話の世界」、絶滅動物や補助犬などを紹介する「動物とともに生きる」を設け、計238冊の資料を展示した。

2. イベント

展示会に関連した講演会やさまざまな催し物を開催している。

○ワークショップ「歩いて測って地図づくり」

[平成16年2月15日(日)：参加者18名]

「みんなのちぎる—全国児童生徒地図優秀作品と子供の地図の本展」の関連行事として、桜美林大学資格・教職教育センター助教授の浜田弘明氏によるワークショップを実施した。歩測地図についての説明の後、親子連れを含めた参加者には、グループごとに館内の施設を歩測測量し、地図(縮尺図)作りを実際に体験してもらった。

○講演会「アメリカの絵本—編集者の視点から」

[平成16年3月4日(木)：参加者69名]

「いろのまほうつかい—エリック・カール絵本の世界—」展の関連行事として、

エリック・カール氏の絵本を多く手がけた米国の編集者アン・K・ベネデューズ氏と評論家レナード・S・マーカス氏による講演会を開催した。作家が編集者によって才能を見出され、育てられ、それが具体的な本という形になるまでについて、編集者の立場と評論家の目で具体的に紹介された。子どもの本関係者、出版関係者、外国人等多くの方の参加があり、質疑も活発に行われた。

○「子ども読書の日」行事「著者と子どもの橋渡しー翻訳出版の舞台裏ー」

[平成16年4月23日(金)：参加者27名]

「子ども読書の日」(4月23日)の行事として、日本放送出版協会第二図書出版部副編集長の猪狩暢子氏による講演会を開催した。本の編集に携わっている立場から、子どもの読書意欲を高めるために編集者のメッセージを若年の読者にどうしたら伝えられるのか等についての講演があり、ヤングアダルト向け図書の出版の現状の紹介もあった。



○講演会「パンチャタントラ：世界で最古の子どものお話集」、「インドに伝わる知恵とこころ：北インドの昔話・なぞなぞ・子守歌から」

[平成16年5月22日(土)：参加者133名]

「蓮の花の知恵ーインドの児童文学」展の関連行事として、本展示会監修者の鈴木千歳氏の展示概要解説、IBBY インド支部事務局長・インド児童文学者のマノラマ・ジャファ氏および拓殖大学教授の坂田貞二氏による講演会を行った。ジャファ氏は、パンチャタントラについて、そのいわれや内容について解説した。坂田氏は現地で録音採集した語りをもとに、インドの口承文芸について紹介した。

皇后陛下の行啓があり、展示会をご観覧になり講演会の一部を聴講された。

○講演会「アジアの子どもの本と私」[平成16年7月3日(土)：参加者91名]

「蓮の花の知恵ーインドの児童文学」展の関連行事として、福音館書店相談役の松居直氏の講演会を行った。実際に編集された本を紹介しながら、講師とアジアとのかかわり、多言語、多民族のアジアで本を出版する難しさや意義について話しをされた。

皇后陛下の行啓があり、講演を聴講された。(本文4ページ~を参照)

- 第19回学校司書全国研究集会への協力（社団法人 全国学校図書館協議会主催、国際子ども図書館協力）〔平成16年7月26日(月)～27日(火)〕

学校図書館への支援の一つとして、全国学校図書館協議会の「学校司書全国研究集会」への協力を行っている。平成16年度の研究集会のテーマは「学校司書は、情報サービスをどのように行うか」であった。参加した学校司書62名に対し、当館職員4名が講演、講義を行った。また、シンポジウムにも当館職員がパネリストとして参加した。

- 「日中韓子ども童話交流2004」関連行事〔平成16年8月18日(水)〕

（日中韓子ども童話交流事業実行委員会との共催）

日中韓の小学4～6年生100名（日本50名、中国25名、韓国25名）および随行者等約70名が参加した。また、同事業実行委員会から肥田美代子衆議院議員をはじめ数名の参加があった。

国際子ども図書館案内ビデオを上映（同時通訳付）後、3グループに分かれて館内見学を行った。引き続き、『日本・中国・韓国の昔話集1』（日中韓子ども童話交流事業実行委員会刊）から昔話3話をそれぞれの母国語で読み聞かせた。

- 子ども向けイベント「聞いてみよう！インドの楽器とインドのこぼれ話」

〔平成16年8月21日(土)：参加者161名〕

「蓮の花の知恵ーインドの児童文学」展の関連行事として、夏休み子ども向けに、インドの民族楽器の演奏（シタールとタブラー）とインドの言語の一つであるベンガル語による絵本の読み聞かせを行った。

- 「児童文学連続講座一当館所蔵の資料を使って」

〔平成16年10月18日(月)～20日(水)：館外35名、館内からのべ34名〕

総合テーマを「ファンタジーの誕生と発展」として、全国の公共図書館等において児童サービスを担当する職員と国際子ども図書館職員を対象とした児童文学連続講座を開催した。（本文7ページ～を参照）

- 講演会「人はなぜ動物絵本を読むのか」

〔平成16年11月6日(土)：参加者62名〕

「本にえがかれた動物展Ⅱ―十二支を手がかりに」の関連行事として、京都大学大学院教授の矢野智司氏の講演会を行った。教育人間学の視点から、子どもの絵本にはなぜ動物が多く登場するの



か、動物絵本を読み解きながら、動物が人間にとってもつ意味について話していただいた。

○ギャラリートーク『本にえがかれた動物展Ⅱ—十二支を手がかりに』

〔平成16年11月7日(日)2回、12月5日(日)1回：参加者計51名〕

展示担当職員により、約40分程の「十二支の動物」の展示資料解説を行った。終了後、希望者には、特別コーナーの説明も行った。



○第6回図書館総合展



図書館界と図書館関連企業による最新情報の交換の場としての図書館総合展が11月24日(水)から26日(金)まで、横浜市のパシフィコ横浜展示ホールで開催された。5回目の出展となった今年は、東京本館・関西館と共に参加した。当館の広報を行うために会場内ブースでパネル展示、パンフレットの配布、案内ビデオの上映等を行った。

○東京藝術大学と協力してのイベント

『本にえがかれた動物展Ⅱ—十二支を手がかりに』に関連して、上野の山文化ゾーンの近隣施設である東京藝術大学と連携して下記のイベントを行った。

・コンサート「藝大と遊ぼう～ゆかいな動物園～」〔平成16年9月19日(日)〕

東京藝術大学奏楽堂で行われた東京藝術大学演奏芸術センター主催の標記コンサートに対して後援を行った。

・演奏会「楽器が奏でる十二支の動物たち」

〔平成16年12月5日(日)：参加者240名〕

演奏会は、約30分ずつの2部に分けて行った。第1部では十二支のうち「子」から「巳」までの動物が登場する曲、第2部では「午」から「亥」までの動物が登場する曲を東京藝術大学学生有志5名が、歌唱およびフルート・バイオリン・ピアノにより演奏した。親子連れの参加が目立ち、童謡など知っている曲にあわせて歌っている子どもも多く見受けられ、会場は楽しい雰囲気に包まれた。

3. 児童サービス

○「子どものへや」「世界を知るへや」の小展示

昨年に引き続き小展示を実施した。本の表紙を展示しておくことにより、多くの子どもが興味をもって本を手にとり、親子で同じ本を楽しむ姿もみられた。

夏休み期間中の小展示「絵本で世界一周」では、世界30カ国の昔話絵本などを集め、その絵本のタイトルを世界地図に書き込んだリストを配布した。子どもたちは読んだ本の国にスタンプを押してもらうのを楽しみに、展示した本を読んでいた。「おやすみなさいの本」についても同様な企画を実施した。

また、廊下に面した小窓に、季節や行事にあわせて本と共に折り紙や人形を作成して飾り、子どもに親しみやすい雰囲気作りを心掛けた。

<子どものへや>

- 「冬のほん」(2003年12月～2004年2月)
- 「おさるの本」(1月～2月)
- 「たのしい学校・ようちえん」(3月～4月)
- 「はるの本」(4月～5月)
- 「ぼうしの本」(5月～6月)
- 「雨のほん」(6月～7月)
- 「ギリシャ+スポーツ=オリンピック!!」(7月～9月)
- 「なつの本」(7月～8月)
- 「秋の本」(9月～11月)
- 「ほんととしょかんのほん」(9月～11月)
- 「おてがみのほん」(12月)
- 「おやすみなさいの本」(12月～)



<世界を知るへや>

- 「世界の冬のおまつり」(2003年12月～2004年3月、12月)
- 「みんなのちず展関連展示」(1月～2月)
- 「いろのまほうつかい展関連展示」(3月)
- 「世界のことば」(3月～7月)
- 「蓮の花の知恵展関連展示」(4月～9月)
- 「絵本で世界一周」(7月～9月)
- 「本にえがかれた動物展Ⅱ関連展示」(9月～)

「くいしんぼうあつまれ～世界の料理の本」(10月～11月)

「かずの本」「ABCの本」(通年展示)



廊下の小窓



○子どものための催物

<子どものためのおはなし会>

職員によるおはなし会を、毎週土曜日・日曜日の午後2時から（4歳から小学1年生対象）と午後3時から（小学2年生以上対象）実施した。2004年は合計190回実施し、のべ1,171名が参加した。

おはなし会はストーリーテリングと絵本の読み聞かせで構成している。春休みや子どもの日には、普段のおはなし会の内容や対象を拡大して、大型絵本の読み聞かせやパネルシアターを実施した。ほぼ毎週参加する顔なじみが増える一方、地元の図書館などのおはなし会に参加した経験が全く無い子どもも多く見られる。

<ちいさな子どものための絵本の時間>

4月から新しく定期的に開催した。2004年は合計18回実施し、のべ92組185人が参加した。絵本の時間は、3歳以下の子どもと保護者を対象として、職員による絵本の読み聞かせとわらべうたで構成している。（本文25ページを参照）

<1枚の紙からミニ絵本作り>

7月31日（土）・8月1日（日）、ワークルームで実施した。講師は職員が担当した。参加対象者は小学1年生以上とした。両日合わせて43名の参加があった。

最初に『本の歴史5000年』（福音館書店）を使い、紙や印刷、本の歴史を紹介した。その後、1枚の紙に切り込みを入れて小さな本を作り、子どもたちに絵や文字を自由に書いてもらった。

本年度は描きたいおはなしをノートに書いてくる子どもが多く、非常に熱心にミニ絵本作りに取り組んでいた。でき上がったミニ絵本を職員に見せて、おはなしをしてくれた子どもも多かった。

○子どもの見学

1月から12月までに、30件718名の見学を実施した。見学団体は、保育園、幼稚園から小・中学校、養護学校、インターナショナルスクールや日本語学級と多様である。2002年の全面開館以来、3年連続で来館した団体も多くあった。

内容は、館内見学（子ども向け当館ビデオの視聴を含む）、おはなし会、調べ学習の援助などを希望により組み合わせ対応している。地方の学校が修学旅行で調べ学習や職場訪問で来館するケースが多くあった。中学生は調べ学習、小学生以下はおはなし会の希望が多かった。

○学校図書館セット貸出し

学校図書館への支援を目的として、世界の国や地域に関する資料とその国の絵本や物語、原語の絵本などを40冊から60冊のセットにして、学校図書館に1ヵ月間貸

出すサービスである。平成16年9月から、新たに「カナダ・アメリカセット」の貸出しを開始し、平成16年1月から12月までに、のべ203校に計10,341冊の資料を貸し出した。平成17年度は、「アジアセット（中国・東南アジア諸国）」の構築を予定しており、平成18年1月からの貸出しを目指している。また、各セットのリストや解題を充実させ、セットを利用する学校だけでなく、広く学校図書館での選書や公共図書館との連携に活用できるようにしていく予定である。



4. その他

○第2回国際子ども図書館連絡会議 [平成16年5月19日(水)]

当館と協力関係にある16機関に昨年度の活動と今後の計画について報告し、当館のサービスについて貴重な意見を伺った。



○国際子ども図書館の図書館奉仕の拡充に関する調査会

国立国会図書館長の諮問により、国際子ども図書館が児童書のナショナルセンターとして今後拡充し発展させるべき図書館奉仕の方向性について調査審議する標記調査会が平成16年9月に発足した。第一回(平成16年9月22日)、第二回(12

月15日)、第三回(平成17年3月16日)が開催された。

委員名簿、議事録等については国際子ども図書館ホームページを参照。

○フランスからの実習生の受け入れ

フランス国立高等情報科学図書館学校(Enssib)から上級司書職の実地研修のため、Marie-Christine Ichikawa氏を平成16年9月7日から30日まで受け入れた。

5. 刊行物

- ・パンフレット：『国際子ども図書館』、同英文版
- ・『国際子ども図書館の窓』
- ・図録『本にえがかれた動物展Ⅱ—十二支を手がかりに』
- ・利用案内：一般向け、子ども向け。各日本語、英語、ハングル、中国語版



数字で見る！

国際子ども図書館

(1) 国際子ども図書館所蔵統計（平成16年12月31日現在）

資料室	図書 (単位：冊)		日本語	児童書(*1)	171,308	
				学校教科書	1,295	
				教師用指導書	2,215	
				児童書関連参考書	12,412	
				小計	187,230	
			外国語	児童書(*1)	欧米言語	30,390
					アジア言語	12,950
				児童書関連参考書	1,732	
				小計	45,072	
			計			232,302
	逐次刊行物 (単位：タイトル)		雑誌	日本語	児童雑誌	920
					児童関連誌	718
				外国語	欧米言語	95
					アジア言語	34
			小計			1,767
新聞			日本語	14		
			外国語	1		
	小計	15				
非図書資料(*2) (単位：点)		静止画・紙芝居		765		
		カード・カルタ		128		
		マイクロフィルム		36		
		マイクロフィッシュ		28,217		
		音楽資料(レコード、CD、カセットテープ)(*3)		568		
		映像資料(ビデオテープ・ディスク)		1,796		
		電子資料(光ディスク、磁気ディスク)		257		
子どものへや 世界を知るへや	図書		日本語	12,512		
			外国語	466		
			小計	12,978		
	逐次刊行物(単位：タイトル)			22		
メディアふれあいコーナー	電子資料			148		

*1 学習参考書、楽譜、「組合せ資料」を含む。

*2 教師用指導書・児童書関連参考書のうち非図書形態のもの数を含む。

*3 教師用指導書のみ(児童用音楽資料は未所蔵)

(2) 国際子ども図書館利用統計(平成16年1月6日～12月26日)

1) 来館者統計*平成12年5月6日～平成16年12月26日までの総入館数:513,121人

	合 計			曜 日 別 内 訳								
	日数	人 数		火 曜 ～ 金 曜			土 曜			日 曜		
		総数	子	日数	人数	平均	日数	人数	平均	日数	人数	平均
1月	22	7,384	1,142	15	4,171	278	4	1,656	414	3	1,557	519
2月	23	9,919	1,340	14	4,857	347	4	2,279	570	5	2,783	557
3月	24	13,858	2,583	17	7,385	434	3	2,719	906	4	3,754	939
4月	24	11,087	1,558	16	6,256	391	4	2,694	674	4	2,137	534
5月	24	12,870	2,053	13	4,606	354	5	4,220	844	6	4,044	674
6月	25	9,538	1,141	17	5,445	320	4	2,082	521	4	2,011	503
7月	26	9,186	1,246	17	5,302	312	5	2,284	457	4	1,600	400
8月	25	11,948	2,176	16	7,654	478	4	2,084	521	5	2,210	442
9月	24	8,899	1,199	16	4,746	297	4	1,930	483	4	2,223	556
10月	26	10,711	1,719	16	5,612	351	5	2,224	445	5	2,875	575
11月	22	9,184	1,165	14	4,496	321	4	2,370	593	4	2,318	580
12月	21	6,736	630	13	3,623	279	4	1,476	369	4	1,637	409
合計	286	121,320	17,952	184	64,153	349	50	28,018	560	52	29,149	561

2) 「資料室」利用統計

	利用状況			資料室別			
	開室日数	人数	平均	第1資料室		第2資料室	
				人数	平均	人数	平均
1月	19	992	52	660	35	332	17
2月	18	1,350	75	801	45	549	31
3月	20	1,176	59	712	36	464	23
4月	20	1,326	66	843	42	483	24
5月	19	1,244	65	825	43	419	22
6月	21	1,020	49	687	33	333	16
7月	22	1,208	55	799	36	409	19
8月	20	1,494	75	970	49	524	26
9月	20	1,110	56	751	38	359	18
10月	21	1,022	49	718	34	304	14
11月	18	1,060	59	669	37	391	22
12月	17	850	50	559	33	291	17
合計	235	13,852	59	8,994	38	4,858	21

3) 本のミュージアムの統計は「活動報告」を参照のこと。

4) 「子どものへや」利用統計

	利用状況						
	開館日数	人数	平均	大人		子ども	
				人数	平均	人数	平均
1月	22	3,739	170	2,733	124	1,006	46
2月	23	5,293	230	4,027	175	1,266	55
3月	24	7,261	303	5,262	219	1,999	83
4月	24	5,269	220	3,891	162	1,378	57
5月	24	6,705	279	4,900	204	1,805	75
6月	25	4,673	187	3,564	143	1,109	44
7月	26	4,453	171	3,215	124	1,238	48
8月	25	7,429	297	5,149	206	2,280	91
9月	24	4,764	199	3,542	148	1,222	51
10月	26	5,457	210	3,939	152	1,518	58
11月	22	4,538	206	3,433	156	1,105	50
12月	21	3,349	159	2,700	129	649	31
合計	286	62,930	220	46,355	191	16,575	58

5) ホール入場統計

	利用状況		
	開室日数	人数	平均
1月	22	3,335	152
2月	23	4,328	188
3月	23	6,356	276
4月	24	4,346	181
5月	23	5,978	260
6月	25	4,232	169
7月	25	3,771	151
8月	25	6,123	245
9月	24	3,477	145
10月	26	4,399	169
11月	22	3,738	170
12月	21	2,924	139
合計	283	53,007	187

※3/6、5/22、7/3は休室

6) 複写サービス利用統計

	来館複写		郵送複写				
	件	枚	公共	大学	他	計	
			件	件	件	件	枚
1月	221	4,821	0	7	32	39	196
2月	210	3,169	8	2	9	19	151
3月	197	4,053	1	0	38	39	360
4月	219	4,161	24	0	13	37	231
5月	215	4,093	33	1	19	53	266
6月	201	4,824	5	1	18	24	367
7月	255	4,713	5	9	91	105	563
8月	402	6,360	0	10	5	15	1,627
9月	261	5,126	1	19	63	83	572
10月	223	3,390	0	19	26	45	162
11月	216	4,629	0	17	4	21	271
12月	181	3,381	0	20	17	37	1,048
合計	2,801	52,720	77	105	335	517	5,814

7) 資料出納統計

	出納 (第1+第2資料室)	
	件	冊
	1月	850
2月	1,066	2,762
3月	964	2,220
4月	939	2,391
5月	1,178	2,597
6月	1,156	2,498
7月	1,196	2,718
8月	1,578	3,628
9月	1,187	2,739
10月	1,108	2,609
11月	925	2,510
12月	847	2,024
合計	12,994	31,796

8) レファレンス統計

		月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	小計	
文献紹介	文書		1	2	4	4	1	2	2	1	5	6	8	5	41	
	電話		1	5	0	1	0	2	1	1	2	5	4	2	24	
	口頭		9	9	2	0	6	10	5	11	6	8	9	4	79	
簡易な事実調査	文書		1	3	4	2	1	5	4	1	1	2	3	3	30	
	電話		3	4	12	7	4	5	4	6	6	7	10	0	68	
	口頭		8	2	4	3	6	2	5	10	4	6	6	5	61	
書誌の事項調査	文書		8	6	14	11	8	9	7	8	12	7	9	5	104	
	電話		1	7	2	0	2	4	1	3	1	1	0	2	24	
	口頭		2	4	3	6	3	2	4	1	3	9	8	3	48	
所蔵調査	文書		4	1	4	7	5	5	1	4	1	3	2	0	37	
	電話		21	27	23	26	29	22	28	26	24	30	24	17	297	
	口頭		22	42	25	37	50	38	36	55	45	28	39	21	438	
所蔵機関調査	文書		2	2	2	2	2	2	2	1	0	0	2	1	18	
	電話		6	1	7	5	4	6	1	5	7	2	3	1	48	
	口頭		6	5	4	6	9	7	2	3	6	10	4	4	66	
類縁機関案内	文書		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	
利用案内	文書		1	0	0	0	2	1	0	0	0	1	1	0	6	
	電話		12	19	23	11	10	18	9	20	18	22	26	12	200	
	口頭	検索 援助		26	32	32	28	23	22	25	46	21	33	30	33	351
		その他		35	53	51	52	71	61	43	99	54	65	74	52	710
その他	文書		0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	2	
	電話		3	6	6	7	8	7	8	8	9	14	4	4	84	
	口頭		19	37	16	27	14	23	18	33	21	33	23	11	275	
小計	文書		17	14	28	26	19	25	17	15	19	19	25	15	239	
	電話		47	69	73	57	57	64	52	69	67	81	71	38	745	
	口頭		127	184	137	159	182	165	138	258	160	192	193	133	2,028	
総計			191	267	238	242	258	254	207	342	246	292	289	186	3,012	

9) 資料館外貸出統計

	合計	内 訳						
		国 書 館						
		国会議員	行政支部図	公共	大学	専門	海外	展示会
冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	
1月	48	2	0	34	5	0	0	7
2月	51	20	0	20	5	0	0	6
3月	49	16	0	13	1	0	0	19
4月	52	7	0	43	1	0	0	1
5月	27	6	0	19	2	0	0	0
6月	55	6	0	49	0	0	0	0
7月	95	0	0	21	1	0	0	73
8月	69	33	0	31	3	1	0	1
9月	87	29	4	27	11	5	11	0
10月	36	2	0	16	2	0	12	4
11月	96	58	12	18	7	1	0	0
12月	19	11	0	8	0	0	0	0
合計	684	190	16	299	38	7	23	111

10) 国際子ども図書館見学実績

	企画協力課		児童サービス課		合 計	
	件数(件)	人数(人)	件数(件)	人数(人)	件数(件)	人数(人)
1月	26	148	3	133	29	281
2月	22	204	3	133	25	337
3月	22	394	2	49	24	443
4月	16	182	5	23	21	205
5月	22	214	4	53	26	267
6月	19	265	4	61	23	326
7月	16	258	3	37	19	295
8月	24	227	1	16	25	243
9月	21	198	2	71	23	269
10月	18	162	1	112	19	274
11月	18	139	1	28	19	167
12月	14	134	1	2	15	136
合計	238	2,525	30	718	268	3,243

11) ホームページ訪問者統計

	1日平均訪問者	1日ページ参照平均	月訪問者	月ページ参照	再訪問者数
1月	745	2,666	23,105	82,672	2,275
2月	742	2,643	21,542	76,668	2,077
3月	677	2,471	21,004	76,621	1,953
4月	769	2,704	23,090	81,148	2,176
5月	875	4,024	27,145	124,760	2,550
6月	761	2,908	22,835	87,260	2,233
7月	825	3,313	25,583	102,718	2,488
8月	1,491	7,679	46,244	238,065	4,397
9月	1,201	4,421	36,039	132,654	3,353
10月	1,242	4,462	38,528	138,332	3,569
11月	1,186	4,038	35,586	121,147	3,288
12月	1,157	3,670	35,869	113,800	3,164
平均	973	3,750	29,714	114,654	2,794
合計			356,570	1,375,845	33,523

12) 国(地域)別ホームページアクセスベスト7

	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位
1月	日本	アメリカ合衆国	台湾	カナダ	フランス	ドイツ	ツバル
2月	日本	アメリカ合衆国	台湾	ドイツ	オーストラリア	カナダ	フランス
3月	日本	アメリカ合衆国	台湾	シンガポール	カナダ	香港	オーストラリア
4月	日本	アメリカ合衆国	台湾	イタリア	カナダ	オランダ	シンガポール
5月	日本	アメリカ合衆国	台湾	オーストラリア	フランス	オランダ	香港
6月	日本	アメリカ合衆国	台湾	イギリス	オーストラリア	フランス	香港
7月	日本	アメリカ合衆国	台湾	香港	オーストラリア	シンガポール	イタリア
8月	アメリカ合衆国	日本	カナダ	ポルトガル	イタリア	ブラジル	フィンランド
9月	日本	アメリカ合衆国	イタリア	ブラジル	カナダ	台湾	オーストラリア
10月	日本	アメリカ合衆国	チェコ	アルゼンチン	ロシア	イタリア	カナダ
11月	アメリカ合衆国	日本	アルゼンチン	台湾	イタリア	カナダ	ロシア
12月	アメリカ合衆国	日本	アルゼンチン	ポルトガル	オランダ	カナダ	台湾

これから...

国際子ども図書館の今後の予定をご紹介します。

<2005年>

4月23日～9月18日

展示会「ロシア児童文学の世界—昔話から現代の作品まで—」

4月23日 子ども読書の日講演会

5月5日 子どものためのおはなし会(こどもの日スペシャル(仮称))

5月下旬 講演会「ロシアの児童文学」(仮題)

7月20日～24日

バリアフリー絵本展

「読書の楽しみをすべての子どもたちに」(仮称)

7月20日 関連シンポジウム

8月上旬 子どものための催物「科学あそび」

8月下旬 講演会「ロシア・フォークロアの楽しさ」(仮題)

10月1日～2006年1月15日

展示会「原画と絵本(タイトル未定)展—野間国際絵本原画コンクール入賞作品アジア・アフリカ・ラテンアメリカから」

10月17～19日

児童文学連続講座(児童図書館員対象)

12月 子どものためのおはなし会(冬休みスペシャル(仮称))

<2006年>

1月 学校図書館セット貸出し「アジアセット(中国・東南アジア諸国)」貸出し開始

1月中旬～6月

展示会「もじゃもじゃペーターとドイツの子どもの本」(仮題)

3月1日 「国際子ども図書館の窓 第6号」刊行

3月 子どものためのおたのしみ会

年間を通してさまざまな行事を企画します。詳しくは、当館ホームページ
<http://www.kodomo.go.jp/>をご覧ください。

利用案内

☆来館利用案内

利用できる人	どなたでも利用できます（ただし第一資料室・第二資料室の利用は18歳以上の方に限られます）。
所蔵資料	国内で出版された児童図書、児童雑誌、外国語の児童書、児童書関連図書・雑誌等。
資料の利用	館内利用のみ。館外への帯出はできません。
資料請求	9：30～16：30（於第一資料室・第二資料室）
開館時間	9：30～17：00
休館日	月曜日、国民の祝日・休日（こどもの日を除く）。年末年始（12月28日～1月4日）、資料整理休館日（毎月第3水曜日）。
休室日	休館日のほか、以下の日が休室日となります。 2階第一資料室・第二資料室：日曜日 3階本のミュージアム：展示会準備等のための休室日

☆レファレンスサービス

児童書・児童文学、児童図書館活動等に関するお問い合わせについて、所蔵調査、所蔵機関調査、書誌の事項調査、簡易な事実調査、文献紹介等を行います。申込み方法は、以下のとおりです。

- ◆直接来館 第一・第二資料室にて受付
- ◆文書レファレンス 最寄りの図書館経由で、郵送・ファクシミリにより受付
- ◆電話レファレンス 資料室開室時間中のみ

※電話では所蔵調査、利用案内、書誌の事項調査（目録記載程度）などについて件数を限って受付けています。資料を直接確認しなければならないなどの時間を要する調査、および聞き間違いが生じやすい外国語文献についてのレファレンスは文書でお願いします。

☆複写サービス

著作権法の範囲内で、国際子ども図書館所蔵資料の複写（有料）を申し込むことができます。

◆来館による申込み

その日のうちに製品をお渡しする即日複写と、後日製品を受け取る後日引渡し複写の二種類があります。

申込受付時間 開館日の10：00～16：00（後日渡しは16：30まで）
製品引渡し時間 10：30～12：00、13：00～16：30

後日引渡しについては、郵送により製品を受け取ることもできます。この場合、料金は後払い（振込）となります。

即日複写は、電子式複写（普通のコピー。白黒・カラー）で、1回につき80頁

以内の申込みの場合に限ります。80頁以上の電子式複写、マイクロ複写（複写過程に撮影作業のある複写）は後日引渡しとなります。

◆文書による申込み

国際子ども図書館ホームページ掲載の書式を用いて、郵送による複写の申込み・製品の郵送も受付けています。料金は後払い（振込）です。詳細は当館資料情報課情報サービス係までお問い合わせください。

☆図書館協力による全国サービス

国際子ども図書館は、各種図書館への支援を通じて全国の利用者に対する図書館サービスを展開しています。満18歳以上の方ならどなたでも最寄りの図書館を通して当館のサービスを利用できます。

◆レファレンスサービス、複写サービス

上記のそれぞれの項をご覧ください。

◆図書館間貸出

当館の「図書館間貸出制度」に加入する図書館等の機関のみが対象となります。詳細は当館資料情報課情報サービス係までお問い合わせ下さい。

※雑誌や昭和25年以前刊行の図書など、貸し出ししない資料もあります。また、貸出資料は借受館の閲覧室内での閲覧のみとし、借受館での複写はできません。なお、国立国会図書館東京本館・関西館所蔵資料については国立国会図書館にお問い合わせください。

☆図書館見学ツアー

「としょかんコース」（毎週火曜日）と「たてものコース」（毎週木曜日）を実施しています。いずれも14時開始です。参加ご希望の方は、開始10分前までに1階事務室で申込みください。また、このツアーとは別に、見学も行っています。詳しくは、企画協力課企画広報係までお問い合わせください。

☆学校図書館セット貸出し

子どもの読書活動において重要な役割を担う学校図書館への支援を目的として、テーマごとに40冊から60冊で構成する資料のセットを貸し出します。

◆セットの種類（平成17年3月現在）

「韓国セット」「北欧セット」「カナダ・アメリカ」（各セットとも小学校高学年向きと中学校向きの2種類）「世界を知るセット」（小学校低学年向きのみ1種類）

◆貸出期間：1ヵ月間。（郵送にかかる日数を含む）

◆費用：セットを当館に返却する際の送料のみ学校図書館でご負担ください。

その他、詳細については、当館児童サービス課企画推進係（内線308）までお問い合わせください。また、当館ホームページ（<http://www.kodomo.go.jp/>）でもご案内していますので、ご覧ください。

国際子ども図書館の窓

第5号 2005.3

発行所 国立国会図書館 国際子ども図書館 平成17年3月1日発行
編集責任者 富田 美樹子
〒110-0007 東京都台東区上野公園12-49
電 話 03 (3827) 2053 (代表) F A X 03 (3827) 2043
E-mail info@kodomo.go.jp ホームページ <http://www.kodomo.go.jp/>
印刷所 株式会社 山越

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分はそれぞれ筆者の個人的見解です。

本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に国際子ども図書館企画協力課協力係に連絡してください。



The Window

the journal of the International Library of Children's Literature

No. 005 March 2005

Contents

Frontispiece: Activities at the ILCL	
Foreword	Mikiko Tomita 2
Exhibition "Wisdom of the Lotus—Children's Literature in India"	3
Children's books and Asia	Tadashi Matsui 4
Report on the 2004 ILCL Lecture Series on Children's Literature —utilizing the ILCL collections	Planning & Cooperation Division 7
Information on Japanese children's books translated into foreign languages—Acquisition and supply of publishing information	Resources and Information Division 9
Children's literature in Former Yugoslavia	Kazuo Tanaka 11
The current situation of children's books in France —From book lists of the five years 1999–2003	Himiko Suematsu 18
"Storytelling for infants"	Hiroko Mikata 25
A project to establish a library in a village in Kenya	Yumiko Fukumoto 26
Visit to the Bologna Children's Book Fair in 2004	Yuri Chiyo 29
Children's books from abroad in the ILCL collections: <i>St. Nicholas</i> from the ILCL's foreign periodicals collection	Yuri Chiyo 32
ILCL activity report	34
ILCL in figures.....	42
Schedule	46
User's guide	47